

開発こうほう

Hokkaido Development Association

共に北海道の未来を創る

October.2026

10月号

北海道開発政策の実相—権限なき調整の系譜—

北方圏構想—第1回

シリーズ「北海道の地域を考える」

第4回 若い女性は、なぜ東京に向かうのか？（北海道編）

シリーズ 北海道の博物館・郷土資料館

見るだけではない、「触れる」・「体験する」郷土に根差した博物館

地方創生

第3期沼田町総合戦略

ガストロノミックツーリズムin北海道

「胆振」

ほっかいどう学

北海道の植物化石



北海道遺産 Hokkaido Heritage

『えびす岩と大黒岩』（『北海道遺産フォト&短歌チャレンジ2024』応募作品）

撮影者 島田 美千代 様

北海道遺産 「積丹半島と神威岬」

積丹半島開発の歴史は古く、ニシン漁の旧大漁場として発達しました。切り立った断崖とシャコタンブルーと形容される神威岬の海岸美は絶景。貴重な自然と産業の古い歴史に加え、明治から昭和初期に栄えた旧ニシン場の遺構として番屋、揚場跡、袋漕、トンネル、旧街道などが保存されている。神威岬の全面禁煙など景観を保護する活動も始まっている。

Contents

「北海道開発政策の実相－権限なき調整の系譜－」

北方圏構想－第1回	1
小磯 修二	

開発調査総合研究所 シリーズ 「北海道の地域を考える」〈4〉

北海道の人口問題の危機 －地域の確かな将来に向けて考えたいこと－ 第4回 若い女性は、なぜ東京に向かうのか？（北海道編）	5
目黒 聖直	

開発調査総合研究所 シリーズ 北海道の博物館・郷土資料館〈7〉

見るだけではない、「触れる」・「体験する」郷土に 根差した博物館 士別市立博物館・公会堂展示館	9
中村 圭佑	

寄稿

北海道の開発と鉄道－1世紀半の軌跡－ <下> 民営化なるも、経営立て直しに苦戦	11
原田 伸一	

地方創生

第3期沼田町総合戦略	15
沼田町役場産業創出課企画政策グループ	

わが村は美しく－北海道 未来へつなぐ 第68回 －豊富町－

「おいしい」から広がる～酪農家のお母さんの知恵と笑顔～	19
農村生活文化伝承活動を進める会	

すすきもものほっかいどうスケッチ 第57回

ピリカノカ 美しい形に認定された石狩の山	20
すすき もも	

ガストロノミックツーリズムin北海道

～食と文化の観点から地域を見つめ、北海道を学ぶ旅～ 第14話 「胆振」	22
遊佐 順和	

北のサクラ彩る歴史と文化 第2回

伊達、厚岸、根室の名木	26
小沢 信行	

「ほっかいどう学」第59回

北海道の植物化石	30
成田 敦史	

地域おこし協力隊 第61回 －石狩市－

道の駅を核とした観光振興	34
清水 瀬菜	

「活動報告レポート」－稚内市－

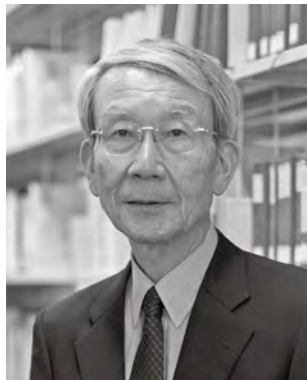
「稚内の歴史的建造物と昭和100年記念事業」	36
稚内市歴史・まち研究会	

お知らせ

人口減少時代における自治体運営シンポジウムのご案内	38
北海道インバウンドフォーラム開催のご案内	39
お知らせ	40

「北海道開発政策の実相 ―権限なき調整の系譜―」

北方圏構想―第1回



小磯 修二 (こいそ しゅうじ)

一般社団法人地域研究工房代表理事、釧路公立大学特命教授

1972年京都大学法学部卒業、北海道開発庁（現国土交通省）に入庁。99年釧路公立大学教授、地域経済研究センター長。2008年同大学長。12年北海道大学公共政策大学院特任教授。20年（公社）北海道観光振興機構会長。22年北海道ガス(株)社外取締役（現任）。23年北海道文教大学地域創造研究センター長。主な著書に『地方が輝くために』（柏艚舎）、『コモンズ 地域の再生と創造』（共著、北大出版会）、『地域とともに生きる建設業Ⅰ、Ⅱ』（中西出版）、『地方創生を超えて』（共著、岩波書店）、『地方の論理』（岩波新書）、『地域政策の新たな潮流を探る』『本の力でまちづくり』（いずれも中西出版）。

I 「権限なき調整」

戦後進められてきた北海道開発政策は、他地域にはない独自の地域政策であり、特定地域の開発政策としては海外からも関心の高い政策です。しかしながら、北海道開発庁が2001年に国土交通省に統合され、北海道開発政策を専担する閣僚がいなくなったこともあってか、次第に政策として語られる機会が少なくなってきたように感じています。

私は、1972年から主に霞が関の北海道開発庁の企画部門を中心に1999年まで北海道開発計画の策定、推進や様々な課題について、開発政策の調整の現場で仕事をしてきました。その後、大学の研究者に転じてからは、国内外にフィールドを広げながら研究者の立場で地域開発政策に関わってきました。その間も、道州制議論や北海道局の是非論など北海道開発体制についての問題のほか、東日本大震災後の東北地域復興に向けた特別政策の議論などに際しては、研究者として、また政策現場での実践者として北海道開発政策の経験から発言する機会がありました。いわば内と外から半世紀を超えて北海道開発政策を見つめ、考察してきたといえます。

戦後の北海道開発政策の成果は、北海道における社会、経済活動の基盤となっている幅広い分野の社会資

本整備を長期的な計画に沿って、安定的に進めてきたことです。しかし、その間、北海道開発行政については、「なぜ北海道だけ」「いつまで続けるのか」という議論や批判もあり、常に緊張感を持ちながら進められてきた政策でもありました。

また、北海道開発政策には、社会資本整備だけでなく、幅広い地域政策分野において、全国画一の法体系を原則とする日本のなかで、実質的に北海道にのみ展開される施策を形成していく営み、挑戦という側面がありました。しかも、その政策は既存の法律によって与えられた権限ではなく、北海道総合開発計画の推進という形で進められました。法令による実施権限を持たずに、計画の理念、趣旨を説明、説得し、権限を持つ省庁と調整しながら進めていく、「権限なき調整」の政策であった点に大きな特性があります。北海道における酪農振興のパイオニアで戦後の北海道開発政策に大きな尽力を果たした黒澤西藏氏は、北海道開発庁の権限について、「群雄割拠の観を呈する中央政府内の強力な各省庁から見ると、まことに吹けば飛ぶような力しか持たされていない」と嘆きながらも、それを「頭脳と企画力で切りぬけ、かいくぐって」きたと述べています（『北海道開発庁20年史』）。



北海道開発審議会長を長く務めた黒澤西蔵

私は、主に北海道開発庁の企画部門で各省庁と対応しながら、このような「権限なき調整」の政策に長く関わってきました。北海道開発政策を理解するためには、社会資本整備面での成果とともに、北海道開発政策として進められた独自の計画調整の系譜についても、理解を深めておく必要があるでしょう。北海道開発政策については、これまで国の北海道開発庁と地方自治体の北海道庁の二重構造という表面的な図式で語られることがあり、そこから対立、無駄という指摘もありました。しかし、そのような狭い視野ではなく、均一的な国の政策のなかで、特定の地域について、より質の高い政策を効果的に進めていくための特定地域開発システムという認識と理解が大切で、政策としての特性はそこにあります。さらに、国の機関としての北海道開発庁と地方自治体の北海道庁との緊密な調整により他地域にはない政策を実現できた面が重要です。独自の国の縦割りの均一的な権限体系のなかで、地域の特性を発揮し、これからの厳しい時代を乗り越えていくためのより有効な地域政策の経験ともいえます。北海道開発政策については、特定地域への特別な優遇政策としてだけではなく、縦割りで均一化しやすい国家システムのなかで、地域の特性を生かし、その可能性を引き出していく他地域にはない「国と自治体との連携による調整の政策」として理解することが大

切です。この経験を次世代に伝えて、将来に向けて進化させていくことが必要だと思います。

今、地域社会をめぐる環境の変化は急激です。急速な人口減少社会の下で、深刻な労働力不足や外国人共生に向けた課題が出てきています。また、デジタル化や生成AIの普及により社会システムの変化、さらに国際情勢の不安定化などが地域社会に大きな影響を与えてきています。これらの問題に北海道という地域が、今後どのように向き合っていけばいいのでしょうか。もはや、国が何とかしてくれる時代ではなく、地域自らが深い洞察力を持って対処していく必要があります。そこでは、法的権限がなくても長期的な構想力と調整力によって積み上げてきた、北海道自らの歴史的な経験、特に他地域にはない独自の政策経験を見つめ直し、その経験を活かしていくことが大切です。また、そこに未来を探るヒントが隠れているようにも感じます。それは、単なる過去の歴史の振り返りではなく、これからの時代を生き抜いていく知恵を、自らの地域で先人が探ってきた試みのなかから探っていく営みでもあります。そのような思いで、本稿では、私が関わったいくつかの北海道開発政策の実践的な経験を伝えていきたいと思います。

本稿を書く契機の一つは、2025年3月の、北海道庁による『北海道現代史 資料編Ⅰ（政治・行政）』の刊行です。この第10章「証言でたどる北海道の政治・行政」で、私は、中央の政治・行政のなかで、北海道開発政策の立場から北海道の政治・行政についてお話をし、それが証言録として掲載されました。証言録を読まれた方から、いくつか心に残る反響がありました。歴史研究に携わっている専門家からは、公式な「資料」だけでは読み解けない北海道開発政策の形成過程を探ることができる貴重な資料だという評価があり、証言録（オーラル・ヒストリー）の意義を再認識しました。また、権限を持たずに調整していく政策現場の苦労のなかに、これまで知らなかった北海道開発政策の実相を見たという感想もいただきました。あらためて北海道開発政策について、私自身の経験を伝えていくこと

の大切さを感じた機会でした。

私の経験では、北海道開発政策の大切な役割として、単一の制度や省庁だけでは完結しない政策調整があります。北海道の開発課題は、幅広い多様な分野にまたがっており、その解決に向けては個々の省庁と調整して解決していかなければなりません、各省庁が法的な政策権限を持つ事項について、北海道についてだけ特別な措置を求めていくのは至難の技です。そこを調整し、地方自治体との密接な連携を通じて、解決の道筋を構築していくことは非常に骨の折れる業務でした。先述の北海道現代史の証言録では、外交上の北方領土問題の解決を地域政策によって支援していく新たな政策の構築や、国鉄の分割・民営化に向けた特定地方交通線の廃止に北海道開発政策として関与していく苦労などをお伝えしましたが、それは、異なる制度や主体を結びつける「調整」自体を政策として機能させていく試みであり、挑戦であったともいえます。今日、地域課題が一層複雑化するなかで、北海道の特性、可能性を活かした発展戦略を探っていくためには、このような「権限なき調整」としての北海道開発政策の歴史的経験が、あらためて意味を持ち始めているように感じています。

最初に本稿でご紹介していくのは、1970年代から北海道で進められた北方圏構想の経験です。

II 北方圏構想の展開

1 新しい座標軸での地域戦略の提起

北方圏構想は、1970年7月に策定された第3期北海道総合開発計画（以下、「第3期計画」）で提起された政策です。北海道は地理的にも北方圏の要衝にあり、気候風土も近似していることから、この有利性を生かして北方圏諸国との経済交流や学術文化交流を積極的に進めていこうという、北海道発の独自の国際交流政策を提起したのです。この政策の意義は、東京からではなく、地方が主体となって、直接、独自の国際戦略を進めていこうという、当時としては野心的な政策の提案でした。

北方圏構想は、一つの事業や制度を指すものではなく、戦略的な理念です。北方圏諸国との学術・文化面での交流事業だけでなく、北海道を世界のなかでどのように位置づけ、その優位性を発揮していくのかを見極めていく世界的な視野での経済戦略理念です。その理念に基づいて、個別の施策や事業を組み合わせ、調整しながら、大きなプロジェクトや事業を実現していくスケールの大きな構想です。現在、地政学的な世界秩序が不安定になってきているなかで、北海道が経験した北方圏構想の取り組みは、あらためて再認識しておくべき貴重な北海道開発政策の経験だと思います。北海道総合開発計画は、国が策定することから閣議決定を経る必要があります、そこでは各省庁と事前に協議を進めていかなければなりません。地域独自の海外との交流を新たな政策として進めていくことを外務省などに説明して、了解を得るのはなかなか大変な調整でした。当時、北海道開発庁の事務次官を務めていた堂垣内尚弘氏（その後、1971年に北海道知事に就任）が大変熱心だったこともあり、「北海道は、地理的にも北方圏の要衝にあり、今後いっそうの進展が予想される北方圏諸国との交流拠点として、わが国における重要な役割をになうことが期待される」という北方圏構想が第3期計画に盛り込まれました。その後、堂垣内氏が知事になったことから、北海道庁には北方圏調査室が設置され、推進の主体となる北方圏調査会（その後、北方圏センターに改組し、現在は北海道国際交流・協力総合センター）が発足しました。札幌市など市町村も参加し、民間では毎日新聞社が趣旨に共鳴して積極的な活動を行うなど、国、地方、民間が協力して構想の推進に当たりました。

当初は、北方圏という言葉になじみがないことから、浸透していくにはやや時間がかかりましたが、次第に北米、カナダ、北欧、中国などの北方圏諸国の地域、自治体と北海道、市町村レベルでの自治体間交流が展開されるようになり、学術、教育、文化、スポーツなどの幅広い分野で、草の根の交流が積み重ねられてきました。たとえば、北海道が提唱して1974年には北方

圏環境会議が開催され、6カ国、20地域の代表が北海道に集まりました。会議は、その後もカナダ、アメリカなどで開催され、「北方圏フォーラム」へと発展していきました。また、札幌市は、1981年に北方都市会議を提唱し、その後「世界冬の都市市長会」に発展していきます。北方圏に共通する都市課題の解決に向けた政策について、各都市の経験を共有していく貴重な場となります。

北方圏構想は、地球を緯度に沿って輪切りにしてみるヨコ思考への発想の転換であり、新しい座標軸の設定ともいえます。私が北海道開発庁に入って最初の業務が第3期計画の推進でしたが、それまで日本の最北端で、東京から遠く離れたハンディのある北海道が、北方圏という座標で見れば中心になれるという斬新な発想で進められた計画づくりには大きな魅力を感じました。

全国的にも、東京を経由しない、地方らしさを発揮した独自の国際交流政策として関心を呼び、鹿児島県では南方圏というコンセプトで「からいも交流」が展開されるなど、他地域にも影響を与えた地方発の政策でした。その後、私は北方圏交流政策の担当を務める機会が長くあり、北海道開発政策としても力を入れていきました。しかしながら、21世紀になると北方圏構想推進の機運は次第に停滞し、国際協力活動全体のかで語られるようになってきています。

しかし、特に現在、国際環境が極めて不安な状況に置かれているなかで、国にすべてを任せるだけでは難しい時代です。それぞれの地域が独自の経済安定に向けた戦略を持つことも大事な命題です。そこでは、それぞれの地域の特性、伝統を生かした未来に向けた国際戦略が必要ですが、北海道においては、半世紀も前から展開されてきた独自の北方圏構想の系譜のなかに、その解決の手がかりがあるように思います。そのような思いで、私が関わった、これまでの北方圏構想の展開についてあらためて振り返ってみます。

2 エネルギー戦略としての北方圏構想

北方圏交流は、学術・文化交流のイメージが強いのですが、当初のねらいとして、スケールの大きい資源、エネルギー戦略がありました。第3期計画の原案を読むと、当時の北方圏構想についての具体的で戦略的な意義やねらいがよく伝わってきます。そこでは、「日本が産業の国際競争力を強め、貿易の拡大により経済発展を図るためには、豊富で良質な資源の安定確保と流通コストの低減を積極的に図らなければならず、このためには、特に北方圏諸国（アラスカ、カナダ北西部、ソ連シベリア・極東）との交流を一層推進することが重要である」という認識が示されています。近接する米・ソ・加の未開発のエネルギーなど資源の流通、加工の拠点、基地としての役割を果たしていこうというかなり戦略的な経済、エネルギー政策として発想されていたことが読み取れます。アラスカ、カナダ北西部、ソ連シベリア・極東に共通するのは、近接する先進国の未開発の寒冷地です。そこに北海道における寒冷地開発のノウハウ、技術によって日本の資源、エネルギーの安定的な調達を目指していこうというねらいです。北海道開発政策の経験を役立てながら、日本の安定的な経済発展を進めていくという地方からの大胆で戦略的な構想でした。当時は、第1次オイルショックの前ですが、他国に資源を依存する日本の経済発展に向けた長期的な視野での戦略構想でした。特に当初力を入れたのは、シベリア・極東での石油、天然ガス、さらに森林資源の開発でした。東西冷戦の時代におけるソ連領内での開発プロジェクトでもあったことから、日本は、経済界が主導する形で進め、日ソ共同で、あるいは日、米、ソの枠組みで検討が進められていきました。

その当時、経済界はエネルギー開発、特に天然ガス開発については大変熱心に取り組んでいました。当時のこの議論を、私は北海道開発政策の現場で垣間見る機会がありました。その内容は次号で紹介します。

北海道の人口問題の危機 ー地域の確かな将来に向けて考えたいことー

第4回

若い女性は、なぜ東京に向かうのか？（北海道編）

（一財）北海道開発協会 開発調査総合研究所長 目黒 聖直

魅力ある職場

今回は、北海道の若い女性が東京圏に転出するジェンダーギャップ以外の理由を探る。ジェンダーギャップの影響については、前号で検討した。

大変な話題になった本の続編である人口戦略会議『地方消滅2』（中公新書、2024年）は、「今なお東京圏へ若い女性が流入」する「要因には、地方に女性にとって魅力ある職場が少ないこともあげられています」と記す（87頁）。確かに、東京圏の繁華街と地方の小規模町村の街中を思い比べると、東京圏では、自社ブランドの美しいドレスをまとった若い女性が接客するアパレルショップが無数にあるのに対し、町村にはそうした店舗はほぼ皆無である。華やかな見た目だけで魅力ある職場とっていいかはわからないが、少なくとも、若い女性に適した雇用の数は圧倒的な差になるといえよう。

改めて、「魅力ある職場」とは何か。まずは、仕事の内容自体が問題だろう。知人の若い女性（札幌に日本本社を置く外資系企業に勤務）は、札幌で語学系の学部に進んだが、同級生の多くは語学を活かせる仕事で集中する東京圏に就職したという。実際に、東京にしかない仕事もあろうし、仕事のやりがいゆえに東京圏に転職したと語る人もいる。

だが、そうした事例が、全体の中ではどれほどの割合を占めるのだろうか。語学のような専門を活かす仕事ならありえるとしても、ファッションビルのショップスタッフ（その全てが地方出身者とも道内出身とも限らないにせよ）が、そのような店での仕事自体を目的にして東京圏に出ていくのか、というとおそ

らくはそうではない気がする。

内容的に魅力があって東京圏でないと就けない仕事というのは、ないとは言わないが、絶対量としてはさほど多くはないだろう。中にはそれを理由に就職する女性もいるが、転出者数全体が男性よりも多くなる決定的な理由になるとは考えにくい。

逆に、地方に魅力ある仕事を得られるならそれだけで若い女性は地方に残るということになるのか。たとえば、WEBデザインは若者にも人気の仕事で、これを学ぶ学生も世の中に沢山いる。クリエイティブな仕事であり、魅力ある仕事の一つといえよう。しかも、筆者が知る限り、女性が非常に多い。そして、この仕事は、インターネットが繋がっていれば、どこにいてもできる。であれば、フリーのWEBデザイナーになれば、地方出身者が学校を出た後にはいくらかでも帰郷しそうな気がするが、そんな話は聞いたことがない。このことから、やりたい仕事があれば若い女性の地方からの転出が直ちになくなるとは考えにくい。

若い女性の転出理由（最初の説明）

勿論、就職の際に仕事の内容を考えない人はいないが、転出の理由としては、多くの場合、もっと単純な意味で「よい」仕事があるから、という事情の方が大きいのではないかと気がする。正規雇用とか、賃金の高さといったことだ。「人はクリエイティブでやりがいのある内容の仕事を求める」と考えがちだが、実際には、いくらそういう仕事でも、いつ契約が切られるかわからないといった事情があれば、簡単には就職しにくい。

以前、テレビのローカルニュースが、新千歳空港で、学校を卒業して看護師として東京圏に転出する女性を取材する場面があった。看護師の就職がなぜ北海道でなく東京圏の病院なのか。東京圏の方が仕事の内容が面白そう、ではなく、待遇面で条件がいいからといった可能性の方が高い気がする（仕事以外の理由もありうるが）。実際、東京圏からは高給での看護師の求人があると聞いたこともある。

30代半ばの筆者の知人女性も、「最低賃金が違うことを見ても明らかなように、東京圏はやはり賃金水準が違う。（同一業種でも）就職企業の選択肢の多さも東京圏にはかなわない。仕事を辞めて専門学校に入学したかつての同僚は、卒業後の就職に有利という理由で札幌ではなく東京圏の学校を選んだ」と話す。もっとも、その元同僚は大好きなタレントのコンサートのため頻繁に上京していたので、それも転居の原因になったかもしれないとのことだが。

要するに、仕事上の理想も大切なことではあるが、実際には、もっと現実的なことを考えていて、生活の安定の確約を求め、賃金や雇用形態といった意味でのいい仕事がある東京圏に転出するのではないか。そうした条件面も含めての「地方には女性に魅力ある職場が少ない」というのであれば、それは確かにその通りなのだろう。北海道の正規従業員比率は、男女とも全国第41位（前号でも引用した『地方で拓く女性のキャリア』巻末ランキング集）だが、順位は同じでも数字自体は、女性の方がはるかに低い（男性75.6%に対し、43.3%）。もっとも、神奈川等三県もこの数字とさほど違いはないのだが、東京都の場合は54.6%と10%も高い。しかも、雇用の絶対量も圧倒的に多い。正規雇用の地位を求めて東京圏に向かうというのなら、それは北海道特有の問題ではないとはいえ、大いにありうる。

そうすると、そこまでして「よい」仕事を欲するのは何故かが気になってくる。そして、それは、守銭奴ではないのだから、結局は使うおカネが安定的に

欲しいということではないかと思える。北海道で特に25～29歳の女性の転出が目立つ（前号表参照）のも、道内で就職してみて少し落ち着いたところで改めて考えてみると、もう少し給料が欲しい、そして、仕事終わりにテレビで見る東京都内のお洒落な場所に気軽に立ち寄れるような街に住みたい、といった気持ちが沸き起こってきた結果なのかもしれない。ファッションビルやディズニールランド、頻繁にあるコンサート等が、男性よりも女性により強く訴えかけることは十分にありえる。

つまり、東京圏への転出の大きな理由とは、地域的なジェンダーギャップでも内容自体が魅力的な仕事の有無でもなく、そこで得られるはずの豊かな消費生活、すなわち、品物やチケット等の購買を楽しめる暮らしこそではないか、ということだ。賃金や雇用の地位は、仕事の問題というよりそうした消費生活のための前提条件として捉えられているという理解である。他方、東京圏には、モノもサービスも買いたいものが豊富にあるという供給側の条件も揃っている。当人たちは、購買を通じて得られる満足感こそが本質なのだろうが、その満足感を実現するのは消費なのである。

ただし、ここで敢えて言うが、豊かな消費生活を送る以前に、そもそも東京圏で、まともに暮らすことはできるのかは定かでない。都内だと中古ですらマンションは一億円を超えると報じられる。かといって、郊外とは言えば、かつて横浜から片道75分かけて通勤した筆者には、それは大変辛い毎日だった。東京圏で就職しようという若い女性たちには、是非そこを考えていただきたく願う。

その他の考えられうる理由

こうして一つの大きな理由は明らかになったと思えるが、それだけが原因というわけにはいくまい。ほかに考えられることを列挙してみる。

① 結婚による転出

パートナーが東京転勤になって、一緒について行

くという事例は少なくはないだろう。札幌支社で働いていたら東京本社から赴任してきた男性と結婚することになり、本社に戻るのに伴って、妻として一緒に東京圏に行く、といった形だ。北海道に限らず全国各地でも起こるのだろうが、東京圏への流れをつくる一つのメカニズムではある。

② 男性に偏った地方企業の後継者

これは、正しくは、東京転出の誘因の話ではなく、若者を北海道に戻す力が働くか否かの問題であるのだが、道内の地方町村出身で、本州に進学した男性が故郷に戻る理由の一つとして聞くのは、家業（会社や農家）を継ぐためというものだ。女性の場合、家業を継ぐことが期待されていないからこそ、自由に進学先の地に残ることができるというわけではあるが、家業を継ぐ男性の数がどれほどかは別にして、その分だけ帰郷する男女の数の差にはなる。勿論、本人の気が進まないのに家業を継がせられるのであれば、褒められた話ではないけれども、女性だからといって家業を継ぐことを期待されないというのは、性による役割の固定化である（ただし、道内で活躍する有能な女性後継者が、マスコミで紹介される例も増えてきたという現実はある）。

③ 大学等への進学

東京圏の一都三県内の大学生数は、国内全学生数の4割にも達するという。そして、東京圏の大学に進学してしまえば、そのままそこで就職してしまう例は多いかもしれない。特に、①と似た話だが、そこで見つけた彼氏と離れがたく、帰郷せずに就職することもある。女性の方が、恋人が住んでいる勤務地に就職先を探した例が多いとの調査結果もある（本連載第二回で紹介した内閣府レポート等）。

実は、全国的に自県大学進学率が上昇している（2002年40%→24年45%）中、北海道は逆に下がっている（71.4%→66.3%。2026.4.19付朝日新聞）。その裏返しで、道外への進学者は割合的に増えていることになり、これも、この「彼氏のもとに」や②の

事情を考慮すると、戻らない女性を増やすことになっている可能性がある。とはいえ、ほかの地域で学生生活を送って見聞を広めたいとか、道内にはない学科で学びたいとかいったときには、道外に出ていくとは言えないのだが。

以上については、①は、本人が愛する人と結ばれて喜んでついていくのなら、周りが目くじらを立てる話ではないのだが、「女が男に付いていく」は性別の役割に通じる話だし、②の項目も女性と後継者という問題になる。結局のところ、ジェンダーの観点は常に意識しておく必要がありそうだ。

なお、以上とは逆に、若い女性がUターンする事例として、都会で子どもを抱えて離婚して、郷里の親のもとへ帰るといった場合がある。小規模町村の人も、「この辺りの若い女性はシングルマザーばかりだ」と語る。これは男性にはない戻り方だと思われるが、札幌から戻るケースはいざ知らず、これまで見てきた様々な数字から判断すると、東京圏からの転入者数にはさほど影響を及ぼしていないようだ。

本論とは全く関係ないが、2014年に起こった銚子市シングルマザー心中殺人事件は、北海道の実家に戻ることのできなかった母親が起こした不憫^{ふびん}でありにも辛過ぎる悲劇である。

転出する本当の理由

ここまで、北海道の地方から東京圏への転出（地方から札幌に出て、さらに東京圏へという流れもある。それが、札幌から東京圏への転出者のうちどれだけの割合なのかは不明だが）の要因を考えた。そして、それは主に、女性の方が豊かな消費生活を求めることの結果ではないかとした。ただ、勿論、現在の小規模町村の若者の男女の数の不均衡は、そもそもが言うまでもなく、札幌への転出の影響が非常に大きい。

豊かな消費生活というのは、当然、道内小規模町村よりも、札幌の方が得られる。つまり、小規模町村での若い女性が減少する理由は、女性たちが、豊

かな消費生活を体感できるとして、札幌に出ることを望み、その一部はそれよりも東京圏の方がさらにいい、と考えたからということになる。

だが、女性の方が消費を好むというのは、考えようによっては安易な結論にも思える。生きる上で、本当に、それが最重要の目標になると考えてよいのだろうか。そうした側面が皆無とは言わないが、消費生活の豊かさを超えた（包含した）人生の本質は別のところにあるような気もする。

そこで、前述の内閣府レポートが、地元就職を希望しない理由として、「地元の風土が好きではない」等の回答があったと記していたことを思い出したい。それが意味するのは、都市に誘因があるのではなく、原因は出て行かれる地方の方にあるという可能性だ。そうすると、北海道にあっても、本当の問題は、そこ（地方）には彼女たちが活躍できる場所も、時間を過ごす場所もないという事実にあるのではないか、という考え方が浮かんでくる。

地方の主産業である農林漁業、建設業等は、（男女差別の意識がないとしても）性質上、力仕事も含まれていて、必ずしも女性向けの仕事ではない。跡取りといっても男性ほど期待されない。それでは、自分が地域社会に必要とされているという実感を持つことは難しい。仕事だけではない。休日にはどこで過ごせばいいのか。男性なら、居酒屋があって昼から飲めればいいが、女性にはショッピングを楽しむ場所も友達と話をする場所もない。都市なら、エステでもネイルサロンでも女性のためにつくられた施設がいくらでもある。女性が主人公になれる。なのに、地方は、職場も消費の場も経済構造全体が女性の存在を前提としない社会になっている。

ろうじやくなんによ老若男女誰なのかわからない一人としての存在の余地はあるかもしれないが、若い女性としての存在する場所も必要とされている実感も得ることがないという状態だ。精神的（役割）にも物理的（滞る場所）にも、女性としての居場所がないのだ。

これでは、アンタたちの好きなようにしていいし、どこに行ってもいいよ、とされているようなものである。だったら、都市に出ていく。

雇用（「よい」仕事）がないとか、娯楽がないとかいった単独の事象が切り出されて転出の理由となるのではない。それら諸状況が全体として、そんな地域社会をつくりだしているということだ。中には男女差別的な成り立ちのものも多少あるとしても、少なくとも北海道では、ジェンダーギャップゆえというよりは今日までに自然発展的に（意図もなく結果的に）形成された地域社会がそうなっているということだ。その環境を甘受できる女性は地元に残っても、そうでなければ都市部に転出して、せめて精一杯消費生活を楽しましようということになる。そして、そうやってしまえば、そのあとにUターンすることも男性に比べれば少ない。

では、どうしたらいいのか。彼女たちのためにファッションビルを用意しろというわけではない。できるはずもない。むしろ、勿論、ある程度は生活上の利便確保が前提となるにしても、その上で、人間としてもっと根源的な生きていて充実感を得られることは何か、それを満たすためにはどうしたらいいか、ということを考えるしかないのではないか。

礼文島の赤ひげと呼ばれる医師を父に持つ^{ますだ あきお}升田晃生氏は、札幌の進学校を経て旭川医大で学んだ後に故郷の島に戻った。テレビ番組の中では、世界で活躍する医大の同級生を羨ましいと感じるときもあると語っていた。それでも、氏が父を継いで島の医者になったのは、自分が島に必要とされていると実感していたからだろう。それが、島に帰るという決断になった。そんな崇高な使命感である必要はないにしても、地元になりたい、戻りたいと思わせられる何かが必要なのではないだろうか。

そのことをさらに考える前に、今回はもう一度だけ、合計特殊出生率について考える。

見るだけではない、「触れる」・「体験する」郷土に根差した博物館 士別市立博物館・公会堂展示館

士別市立博物館 学芸員 中村 圭佑



士別市立博物館

HPはこちら



士別市立博物館は、旭川市から北に約60kmの場所に位置する士別市にあり、士別市立博物館と公会堂展示館の2つの展示施設からなる総合博物館です。

士別市立博物館は、昭和56（1981）年に士別80年を記念して建てられ、「士別の歴史」「天塩川流域の自然と文化」「北方圏」をテーマに開館しました。また、士別市立博物館に隣接するかたちで、かつて議場として使用された士別市旧公会堂を復元し、美術館的機能を持った公会堂展示館として平成元（1989）年に開館しました。

平成23（2011）年には常設展示室のリニューアルを行い、「郷土の歴史と文化」「天塩川流域の自然」をテーマに展示や講座などといった教育普及活動に力をいれて取り組んでいます。

歴史の常設展示では、士別市内から出土した石器や土器、最北で最後の士別屯田に関する資料、農機具や商店の看板、昭和の生活道具まで幅広く展示を行い、士別のこれまでの歩みを紹介しています。中でも、かつて士別の町中を走っていた馬車鉄道の展示と、屋外



かつて士別市内を走っていた馬車鉄道

にある屯田兵屋は来館者の目を引くものとなっていて、最初期の士別の様子をうかがうことができます。

また、公会堂展示館には士別にゆかりのある方の作品や資料を展示しており、パリなどで版画家としても活躍した小池暢子氏の版画作品や、女優で冒険家でもあった和泉雅子氏の北極点遠征資料やイヌイットの民族資料なども展示しています。このほかにも自然史展示では岩石や化石などの士別の地質に関わる資料や、

動植物のはく製や標本なども展示しています。

これらの博物館の展示資料は触れられないことが一般的ですが、士別市立博物館では触れることができるハンズオン展示が多くあります。資料に直接触れることで、質感や重さ、使い方など、見るだけでは難しい展示資料の情報を感じてもらい、より深く資料について理解してもらうための取り組みとして行っています。

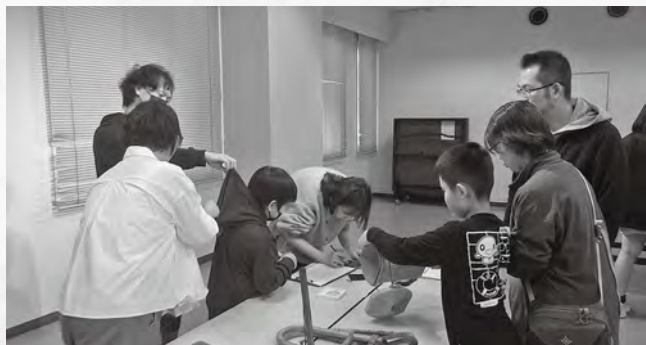


触れることができる展示資料（戦前の教科書）

また、士別市立博物館は主催講座・依頼講座を合わせて、年間50回程度開催していて、この講座の多さは士別市立博物館の特色の1つとなっています。

特に主催講座ではまが玉づくりや古文書教室などの歴史に関する講座や、自然観察やウチダザリガニ捕獲体験などの自然に関する講座など、歴史から自然に関わる幅広いジャンルの講座を開催しています。

最近では昔の生活に使われた道具、いわゆる民具を活用した講座は参加者から好評を得ています。現在で



民具を使った講座の様子（これ何？博物館のコレクション）

は使うことがなくなった古い民具や、用途が分からなくなった民具を見たり・触れたりしながら、参加者や博物館学芸員も交えて自由に考えるといった内容になっています。

講座を通して普段では触れることのない資料に触れる機会になるだけでなく、ご年配の方から子どもまで、参加者同士の交流の場にもなっています。

また、特別展示活動では士別の歴史や自然をテーマとして、学芸員がそれぞれ担当して特別展・企画展を開催しています。

最近では、歴史展示では「戦後80年展」「昔の遊び展」「古文書展」、自然史展示では「はじめての野鳥観察」「博物館周辺の植物展」「雪氷展」などを開催しました。このほかに、日本版画協会が主催する巡回展を、三年に一度、士別でも開催しており、普段では目にすることの少ない、様々な技法で制作された版画を見る貴重な機会となっています。こうした展示を通じて、士別の歴史や自然、芸術など魅力を発信しています。



昨年度開催した「戦後80年展」の様子

ここでは紹介しきれませんが、ほかにも博物館ボランティアと協力した取り組みや、士別市立博物館で委嘱している特別学芸員という外部の専門的知識を持つ方々と調査研究活動なども行い、博物館講座や展示の充実を図っています。

見るだけでなく、「触れる・体験する」というアクションを通じて多くの方に、士別という町に関心を持ってもらえるよう、今後も取り組んでいきたいと思っています。

北海道の開発と鉄道 —1世紀半の軌跡— 〈下〉



原田 伸一 (はらだ しんいち)

1950年生まれ。函館市出身。室蘭工業大学開発工学科卒業後、1973年4月、(株)北海道新聞社入社。編集局、函館支社長などを経て、2015年6月、常務取締役で退任。以後、鉄道関係の執筆活動に入る。著書に『函館・道南鉄道ものがたり』『海峡の鉄路 青函連絡船 110年の軌跡と記憶』『北海道 国鉄蒸気機関車の記録』『北海道の貨物列車』『年表と写真で見る北海道の国鉄』(共著)(いずれも北海道新聞社刊)がある。総務省北海道管区行政評価局「行政改善推進会議」座長。

民営化なるも、経営立て直しに苦戦

幌内鉄道から開業100年の節目となる1980(昭和55)年10月、函館本線に続いて千歳線・室蘭本線の電化が完成し、空港直結の千歳空港駅(現・南千歳駅)が開業するなど、札幌圏の輸送が飛躍的に強化されました。これにより、本州との連絡輸送は従来の青函連絡船に代わり、全国各地と短時間で結ばれる千歳空港が主役となったのです。一方で、「鉄道離れ」が加速し、民営化を挟んで経営の立て直しが課題となる苦難の時代を迎えました。

◆石勝線開通、千歳線の高度化進む

千歳空港駅開業から1年後の1981(昭和56)年10月1日、同駅と帯広・釧路方面を短絡する石勝線(千歳

空港駅-新得駅間、132.4km)が開業しました(写真1)。千歳空港駅から新線を建設して室蘭本線追分駅に至り、夕張線の一部と新線を使って、新得駅手前で根室本線と合流するルートです。当初は1974(昭和49)年度の開業予定でしたが、日高山脈をトンネルと鉄橋で貫く難工事の上、公共投資の抑制もあり、大幅に遅れました。開業により、根室本線の滝川駅-富良野駅-新得駅経由だった特急や急行は石勝線経由に変更され、札幌駅-釧路駅間の特急の所要時間は以前に比べて平均40分程度短縮されました。

石勝線は今まで鉄道に縁がなかった沿線のリゾート開発の起爆剤になりました。途中には占冠駅と石勝高原駅(現・トマム駅)が新設され、石勝高原駅付近には民間企業がホテルやスキー場などヨーロッパ風の施設を建設。千歳空港から特急で1時間ほどで到達できる大規模リゾートの実現は、観光産業の拡大を目指す国や北海道の開発計画とマッチする成果でした。

国鉄はホテルとタイアップして1985(昭和60)年、急行用気動車を改造した「アルファコンチネンタルエクスプレス」(通称アルコン、3両編成)(写真2)をデビューさせ、リゾート客の誘致に本格的に乗り出しました。先頭車前部の展望席は傾斜したガラス張りで、ダークブラウンに統一された斬新なスタイルは「走るホテル」と形容され、全国的なブームとなる「ジョイフルトレイン」(写真3)の先駆けとなりました。また1986(昭和61)年3月には、千歳空港との連携を強めるため、旭川駅-札幌駅-千歳空港駅の間に、札幌駅のみ停車の電車特急「ホワイトアロー」が新設されるなど、急速に千歳線の高度化が図られるようになります。

◆赤字路線、次々に淘汰

こうした華やかな話題の一方、約37兆円もの巨額の赤字を抱え、経営に行き詰った国鉄は、民営化した上で旅客は地域ごとに分割し、貨物は全国1社で運営することになりました。これにより、国鉄北海道支社は北海道旅客鉄道会社(JR北海道)として独立することになり、経営を軌道に乗せるため、不採算部門を大胆に削減する必要に迫られました。すでに根北線や白糠線などは廃止されていましたが、国鉄は羽幌線や深名線、池北線など長大路線についても廃止する方針を決定。地元には戸惑いと反発が広がりましたが、最終



写真1 札幌圏と道東を近づけた石勝線。写真は上り特急「スーパーおおぞら」=占冠駅-新夕張駅間、2011.5.7

写真2 廃車後、保存されている「アルコン」の前頭部=JR苗穂工場、2015.10.24

写真3 1992年デビューのリゾートトレイン「ノースレインボーエクスプレス」=宗谷本線間寒別駅付近、2015.11.1

表 1 国鉄民営化前後の廃止路線

線 名	廃 止 日	距離(km)
根北線(斜里-越川間)	1970.12.1	12.8
南美唄支線(美唄-南美唄間)	1973.9.9	3.0
白糠線(白糠-北進間)	1983.10.23	33.1
万字線(万字-志文間)	1985.4.1	23.8
渚滑線(渚滑-北見滝ノ上間)	1985.4.1	34.3
相生線(美幌-北見相生間)	1985.4.1	36.8
岩内線(小沢-岩内間)	1985.7.1	14.9
興浜北線(浜頓別-北見枝幸間)	1985.7.1	30.4
興浜南線(興部-雄武間)	1985.7.15	19.9
美幸線(美深-仁宇布間)	1985.9.17	21.2
手宮線(南小樽-手宮間)	1985.11.1	2.8
胆振線(伊達紋別-俱知安間)	1986.11.1	83.0
富内線(鶴川-日高町間)	1986.11.1	82.5
広尾線(帯広-広尾間)	1987.2.2	84.0
瀬棚線(国縫-瀬棚間)	1987.3.16	48.4
湧網線(中湧別-網走間)	1987.3.20	89.8
士幌線(帯広-十勝三股間)	1987.3.23	78.3
羽幌線(留萌-幌延間)	1987.3.30	141.1
国鉄民営化	1987.4.1	
幌内線(岩見沢-幾春別間)	1987.7.13	18.1
松前線(木古内-松前間)	1988.2.1	50.8
歌志内線(砂川-歌志内間)	1988.4.25	14.5
標津線(標茶-中標津-根室標津-厚床間)	1989.4.29	116.9
名寄本線(名寄-中湧別-遠軽-湧別間)	1989.4.30	143.0
天北線(音威子府-南稚内間)	1989.4.30	148.9
池北線(池田-北見間)	1989.6.4	140.0
上砂川支線(砂川-上砂川間)	1994.5.16	7.3
深名線(深川-名寄間)	1995.9.3	121.8
合計		1601.4

的には地元も容認せざるを得ませんでした(表1)。

他方、当時の道路網を見ると、1971(昭和46)年に北海道で初の高速道路である道央自動車道(道央道)が千歳IC-北広島IC間が開通したのをきっかけに、札幌や苫小牧方面に次々と延伸し、やがては北海道全体に高速道路網を拡大する事業が本格化していました。1983(昭和58)年には道央道の札幌IC-岩見沢IC間が開通し、これをもって道内の高速道路の総延長は100kmを達成。高速道路だけでなく、一般道路の改良や拡幅も軌道に乗り、都市間バスや長距離トラックなどが鉄道輸送に取って代わるようになりました。

同時に各輸送機関の優位性を生かし、総合力を発揮させる方策が取られるようになりました。例えば、主要駅とバスターミナルを併設することなどです。石炭産業や開拓生活を支えてきたローカル線の廃止は地元には打撃でしたが、バス転換は時代の流れから見ると、止むを得ない判断だったのでしょう。

◆民営化スタート、青函トンネルも開通

1987(昭和62)年4月1日、国鉄の分割・民営化により、北海道旅客鉄道株式会社(JR北海道)が誕生しました。旅客会社は北海道を含めて6社、貨物会社は

全国1社となり、より柔軟な経営が可能になりました。翌1988(昭和63)年3月13日、青函トンネル(53.9km)が供用開始となり、函館と青森を結ぶ海峡線が開業しました。世界最長の海底トンネルとなった青函トンネルは注目を集め(当時は陸上トンネルでも世界一の長さ)、同日ダイヤ改正のキャッチフレーズは、本州と四国の間を鉄橋で結んだ備讃線も含めて「レールが結ぶ、1本列島」と高揚感あふれる表現でした。

これを機に、札幌駅-上野駅間には夜行寝台特急<北斗星>が運転開始(写真4)。函館駅-盛岡駅間には東北新幹線と接続する特急<はつかり>、札幌駅-青森駅間には夜行急行<はまなす>、函館駅-青森駅間には客車編成の快速<海峡>などが新設されました。とりわけ、ブルートレインの<北斗星>は話題となり、予約を取るのが難しくなったほどでした。また、貨物列車も青函連絡船で中継する必要がなくなり、電気機関車に引かれたまま本州とを往復できるようになりました。

その青函連絡船は同日をもって80年間の歴史を閉じました。最後の航海に当たったのは青森港発が八甲田丸、函館港発は羊蹄丸で、両船は夜の海峡ですれ違い、互いに汽笛を鳴らして乗客ともども津軽海峡に別れを告げました。青函連絡船が就航した1908(明治41)年以来、80年にわたって運んだ旅客は1億6000万人、貨物は2億4700万トンに上ります。それらの数字は、北海道の発展を支え続けた証といえるでしょう。

◆高速化実現、禁煙車の導入も

民営化の前後、JR北海道は次世代に向けて、様々な挑戦を展開していました。1986(昭和61)年10月、当時最新鋭の特急気動車キハ183系500番代の高速性能試験を行ったところ、千歳線内で146.9km/hを出し、国内在来線の気動車としては最高記録を達成。こうした実績を重ねて1990(平成2)年、札幌駅-旭川駅間に新製785系電車(写真5)による特急<ホワイトアロー>がデビューします。最高速度130km/hで走行し、乗り心地も良く、1日13往復が設定されました。

また、非電化区間を走行する気動車特急では1994(平成6)年、曲線でも高速を維持できる振り子式キハ281系(写真6)が運行開始となり、次いで283系が導入されました。それぞれ特急<スーパー北斗>、<スーパーおおぞら>に充当され、785系と同じ最高速度で



写真4 ブルートレインとして人気を集めた寝台特急<北斗星>。上野駅から一夜を走り抜け、朝日を浴びて札幌に向かう＝函館本線七飯駅-大沼駅間、2007.6.16

写真5 特急<ホワイトアロー>などで活躍した電車785系(現在は特急<すずらん>で使用)＝函館本線豊幌駅-江別駅間、2016.9.21

写真6 振り子気動車キハ281系<スーパー北斗>＝函館本線大沼駅-仁山駅間、2011.7.11

運転。これにより、札幌駅－函館駅間の所要時間は従来の最短3時間29分から2時間59分に短縮されました。

ソフト面にも目を向けると、1982（昭和57）年、全国一斉に特急列車の1両のみを禁煙とする措置が取られました。健康問題に対応するためです。その後、禁煙の動きが加速し、2006（平成18）年には道内完結の全列車の禁煙が実現しました。1986（昭和61）年には特急電車に初めてカード式公衆電話が取り付けられ、乗車中でも連絡が取れるようになりました。携帯電話がなかった時代なので、電話の前には行列ができたそうです。1996（平成8）年8月、弱者への配慮として優先席が富良野線の車両に新設され、やがて全線に普及しました。また、コンピューター技術が進んだため1998（平成10）年、札幌駅などに自動改札機が設置されました。2008（平成20）年にはICカード乗車券「Kitaca」が登場し、やがて全国各線で使用が可能になるなど、画期的な進歩を遂げました。

◆新幹線開業、「道民夢」実現

民営化によるサービス向上は続きますが、あつてはならない事故が連続することになりました。2011（平成23）年5月、石勝線のトンネル内を走行中の釧路駅発札幌駅行き特急〈スーパーおおぞら14号〉が脱線して車両6両が炎上し、乗客・乗員252人中、79人が煙を吸うなどして負傷する事故が発生。原因は車両床下にある減速機の吊りピンが脱落した結果、減速機が垂れ下がり、それが軌道と激しくぶつかって脱線に至ったのです。原因が明らかになると、避難誘導のあり方も含めて、JR北海道は厳しい批判にさらされました。

さらに2013（平成25）年9月、函館本線大沼駅構内で貨物列車が脱線し、調査の中で、保線担当者がレールの検査データを改ざんしていたことが発覚しました。度重なる事故や不祥事を受け、JR北海道は特急〈スーパー北斗〉など特急列車の減便・減速の措置を取り、信頼の回復に努めることになりました。民営化以降、列車の高速化に重点が置かれ、安全の徹底を怠ったとの批判も聞かれました。

そうした中、全国新幹線網に直結する北海道新幹線新青森駅－新函館北斗駅（函館本線渡島大野駅を改称）間が、2016（平成28）年3月26日に開業する運びとなりました。途中、本州側に奥津軽いまべつ駅（JR北海道の管轄）を新設、北海道側は木古内駅（江差線木古内駅を改装）が停車駅となりました。車両は東北新

幹線のE5系をモデルに、車体にラベンダー帯が入ったH5系4編成（40両）が導入されました（写真7）。列車の愛称は東北新幹線の〈はやぶさ〉を延

長運転する形となり、新函館北斗駅－上野駅間には10往復を設定。所要時間は航空機と対抗できる「4時間切り」が期待されましたが、青函トンネル内での安全走行に配慮して最高速度を140km/hに抑制したため、最速で4時間2分にとどまりました。

青函トンネル前後は在来線貨物列車や団体列車が走行するため、木古内駅－奥津軽いまべつ駅間では新幹線の本線では初めて「3線軌条方式」（約82km）が採用されました（秋田新幹線の一部にあるが、10km程度のすれ違い用の設備）。これは軌間1,435mmの新幹線と同1,067mmの在来線をレール3本で走らせる方式（レール1本が共用）で、ポイント部分は円滑な走行ができるよう工夫されています。なお、北海道新幹線の開業により、青函トンネル開業以来、北海道と本州を結んでいた特急〈北斗星〉・〈白鳥〉の他、夜行急行〈はまなす〉などが廃止。同時に江差線五稜郭駅－木古内駅間は、地元自治体などが出資する第三セクター道南いさりび鉄道に移管されました。

◆不動産開発に活路

北海道新幹線開業の熱も冷めやらない2016（平成28）年11月、JR北海道は「単独では維持が難しい路線・区間」を公表しました。廃止・バス転換を図る「赤線区」と、存続を前提に見直しを進める「黄色線区」の2つが揭示され、「待ったなし」の危機感がにじみ出た内容でした。赤線区とされた5線区は、2019（平成31）年4月の石勝線夕張支線を皮切りに順次廃止され、2026（令和8）年4月、留萌本線最後の区間となっていた深川駅－石狩沼田駅間の廃止で区切りがつけました（表2）（写真8）。日高本線などは大規模災害の復旧に手が回らなかったという事情もありますが、地元の利用者には痛手でした。



写真7 北海道新幹線開業を前に函館に陸揚げされた直後のH5系先頭車＝新幹線準備運輸車両所（現・函館新幹線総合車両所）、2014.11.13



写真8 2026年4月1日に廃止された留萌本線石狩沼田駅。訪れたときは「ラストランまであと190日」と標示されていた＝2025.9.23

表2 赤線区

廃止された「赤線区」一覧	廃止日	距離(km)
石勝線夕張支線（新夕張－夕張間）	2019.4.1	16.1
札沼線（北海道医療大学－新十津川間）	2020.5.7	47.6
日高本線（鶴川－様似間）	2021.4.1	116.0
留萌本線（石狩沼田－留萌間）	2023.4.1	35.7
根室本線（富良野－新得間）	2024.4.1	81.7
留萌本線（深川－石狩沼田間）	2026.4.1	14.4
合計		311.5

また、黄色線区は「1日1kmあたりの平均旅客輸送人員が200人以上2,000人未満で、収益に対して運営費が大きく上回る線区」と規定され、営業赤字の合計が年間150億円に達します（表3）。これには石北本線など特急や貨物列車が走る路線も含まれ、地元負担に関わることもあって、なかなか議論が進んでいない状況です。

表3 黄色線区

「黄色線区」一覧	距離(km)
宗谷本線（名寄－稚内間）	183.2
石北本線（新旭川－網走間）	234.0
釧網本線（東釧路－網走間）	166.2
根室本線（釧路－根室間）	135.4
根室本線（滝川－富良野間）	54.6
富良野線（旭川－富良野間）	54.8
室蘭本線（岩見沢－沼ノ端間）	67.0
日高本線（苫小牧－鶴川間）	30.5
合計	925.7

こうした中、経営を直撃する不安要素も表面化しています。「2030年度末までに開業」が予定されていた北海道新幹線新函館北斗駅－札幌駅間の工事がトンネル掘削の難航で遅れ、「2038年度末以降開業」と8年延期されたのです。当初開業予定の2030年度は、官営幌内鉄道の「開業150年」の節目に当たることもあり、JR北海道は札幌延伸開業を飛躍台に経営改善に乗り出す構えを取っていました。しかし、その戦略が崩れたため、今後の計画を立て直す必要に迫られています。

一方、2026（令和8）年7月、JR北海道は道内外の著名経営者による『稼ぐ力』PT（プロジェクトチーム）を設置しました。意見を集約し、今後の経営に反映させるとしています。同社はすでに桑園や苗穂地区などで、自社不動産を活用してショッピングセンターやマンションの建設を手掛けていますが、PTではJR苗穂工場敷地を含む札幌市内をはじめ、快調な千歳線沿線の不動産開発などが主要な論点になるでしょう。

また、北広島駅付近に建設中の新駅「Fビレッジ駅」が2028（令和10）年3月にも開業することも追い風になります。なお、JR北海道は2026年9月、鉄道外収益を増やすため新会社を設立し、黄色線区については国が主導する協議会を設置することを表明しました。

◆知恵絞って「鉄道2世紀」へ

筆者（原田）は、現在311あるJR北海道全線全駅の歴史と特色を本にまとめるため、途中下車を繰り返しながら巡っています。札幌市内の駅は別格としても、賑やかな駅がある半面、人の姿がない、駅前には廃屋ばかり、という寂しい駅もあります。実際、この10年ほどで、全道で130以上の駅が廃止されました。地方で過疎と少子高齢化が進む一方で、都市集中に歯止めがかからないからです。

その中でも人が集まる駅もあります。例を挙げると、①道の駅と併設して地方の産物を販売し、鉄道利用者以外の旅行者も呼び込む（釧網本線浜小清水駅など）、②行政の出先機関や図書館などを併設し、住民が立ち寄る機会を増やす（根室本線赤平駅、石北本線女満別駅・生田原駅など）、③観光協会と協力して観光案内や地元産物を販売し、飲食サービスをする（室蘭本線早来駅・豊浦駅、宗谷本線比布駅など）、④その駅独自のメニューを提供する（「最北の駅そば」を売り物にする宗谷本線音威子府駅）（写真9）、⑤地元大学生



写真9 特産の黒いそばが人気の音威子府駅そば店。昼が近づくとドライブ客も列を作る＝2026.6.15

らが駅を清掃し、「駅カフェ」を開いて交流の場としている（函館本線江部乙駅）－などの駅です。こうした駅に行くと、鉄道と住民が一緒になって駅の賑わいを創出していることが伝わってきます。

北海道総合開発計画は、2024（令和6）年度から第9期計画が進められています。同計画の目標として①食料供給力を強化する、②魅力的な観光資源を高度化する、③ゼロカーボンの実現に取り組む－などが掲げられています。これらは歴史的に見ると、実は北海道の鉄道の目的や役割と大いに合致するのです。1世紀半にわたって築き上げられた北海道の鉄道は、まだまだ可能性を秘めています。様々な立場の方が知恵を出す中で、「鉄道2世紀」に向けての「鉄道と北海道の未来図」が描かれることを願っています。（完）

第3期沼田町総合戦略

沼田町役場産業創出課企画政策グループ

1 はじめに 沼田町の概要

北海道空知地方北部、札幌市から北へ約120km、旭川市からは西へ約45kmほどの距離にある、人口2,700人ほどの小さなまち・沼田町。石狩平野の北端に位置し、町域のほとんどが山岳地で占められ、南部に広がる平坦地に市街地や水田地帯が広がっています。美しい山々と、雨竜川や幌新太刀別川などの河川による清らかな水がもたらす肥沃な土地に恵まれた、四季の移り変わりを感じられる自然豊かな美しい街です。



沼田町風景

北海道唯一の勇壮な喧嘩あんどんで知られる「夜高^{ようたか}あんどん祭り」や、幌新地区の溪流に舞うほたる、冬の豪雪を逆手に取った雪の利活用の取組や、道内屈指の化石の産出地、そして米や加工用トマトといった農産物など、誇れるものが多くあります。魅力的な要素が多いだけに移住者にも人気で、某雑誌の「住みたい田舎ランキング」では北海道エリア総合ランキングで連続1位を獲得しています。旧JR石狩沼田駅からの徒歩圏内にほとんどのインフラが集約されているといった暮らしやすさにも注目が集まっています。



夜高あんどん祭り

2 沼田町の人口の推移

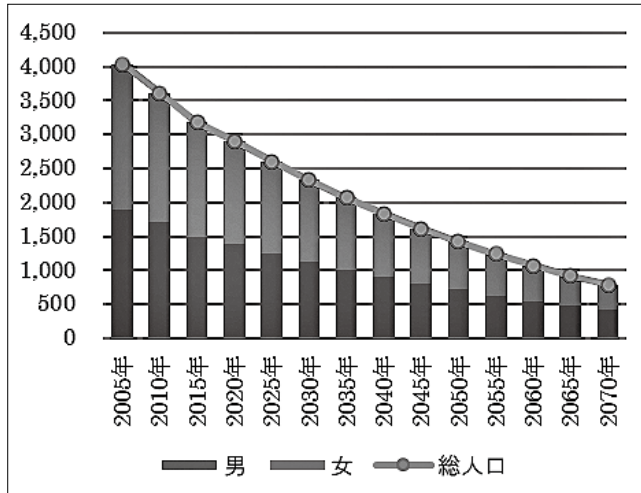
沼田町では、1955（昭和30）年に19,362人に達しましたが、炭鉱が全て閉鎖された1970（昭和45）年には8,177人まで人口が急激に減少してから現在まで人口減少が続いています。

1972（昭和47）年以降、自然増減（出生数－死亡数）については、沼田町の社会的背景などから母親世代の人口減少により出生率の低下や出生数が減少傾向にあったものの出生者数が死亡者数を上回っていたため「自然増」の状態でしたが、1989（平成元）年以降は逆転し、死亡数が出生数を上回り、「自然減」に転じています。

社会増減（転入数－転出数）については、2015（平成27）年、2017（平成29）年、2018（平成30）年、2021（令和3）年、2022（令和4）年と、社会増となる年もありますが、多くは一貫して転出超過（社会減）が続いています。

2025（令和7）年以降については、国立社会保障・人口問題研究所（社人研）の推計によれば、今後も人

口は緩やかに減少を続け、2050年には、1,421人（現在から約50%減少）になり、2070年には792人（現在から約70%減少）になるものと推計されています。



総人口男女別の推移と将来推計

3 沼田町総合戦略の概要

2014（平成26）年度に、まち・ひと・しごと創生法（平成26年法律第136号）が制定され、2014（平成26）年12月27日に国の人口と現状、将来展望を提示する「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン」及び「まち・ひと・しごと創生総合戦略」が閣議決定され、これを受けて地方公共団体も、国の長期ビジョン総合戦略を勘案して、地域将来展望を提示する地方人口ビジョン及び地域の実情に応じた地方版総合戦略を策定することになり、2015（平成27）年度に沼田町においても「沼田町総合戦略」及び「沼田町人口ビジョン」を策定しました。

その後、国では第1期の5年間の施策の検証を行い、優先順位も見極めながら、より一層地方創生を充実・強化するため、「第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略」が2019（令和元）年12月20日に閣議決定されたことから、沼田町においても、第1期の枠組みを継承しつつ、これまでの取組の検証や沼田町第6次総合計画を勘案し、切れ目のないよう「第2期沼田町総合戦略」を2020（令和2）年度から、分野ごとに設定した

4つの基本目標の下、具体的な施策を組み立て、取組を進めてきました。

その後国では「全国どこでも誰もが便利で快適に暮らせる社会」を目指す「デジタル田園都市国家構想」の実現を図るため、「第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略」を抜本的に改訂し、2023（令和5）年度を初年度とする5か年の「デジタル田園都市国家構想総合戦略」を新たに策定し、2022（令和4）年12月23日に閣議決定されました。

これを受けて、沼田町においても、これまでも進めてきた地域の社会課題解決や魅力向上に向けた地方創生の取組をデジタルの力を活用して継承・発展させていくために、「第3期沼田町総合戦略」を策定しました。

また、「沼田町人口ビジョン」についても2015（平成27）年度の策定当初の目標数値と現状の人口目標に乖離が生じていることから併せて見直しを行いました。

4 「第3期沼田町総合戦略」の基本目標と具体的な施策

【基本目標1】若者たちが働きたいと思えるような魅力ある産業の創出を目指す

地域に潜在する豊富な資源の磨き上げと人材を活かし、若者たちが働きたいと思えるような魅力ある産業の創出を目指します。

基幹産業である農業においては、持続可能な力強い農業構造の確立に向けた取組として、スマート農業の推進や、「加工用トマト生産量日本一のまち」を目指して、機械収穫や農福連携の実現に向けた取組を進めていきます。また、持続的な町内経済の活性化を目指して、新たな起業や商業活動、商品開発及び事業の継承・継続を推進し、積極的かつきめ細やかな企業誘致活動を展開します。

<方針>

- ① 魅力ある農業をつくる
- ② NUMATA TOMATO TOWN構想の推進
- ③ 商工業の振興
- ④ 雇用対策の推進

【基本目標2】多様なひととの繋がり^{つな}を大切に100年後も持続可能なまちづくりを目指す

沼田町には、夜高あんどん祭りやほたる、化石や雪エネルギーなど他にはない特色ある資源があり、それらを活かし、世界に誇れる環境を創り出すことで、様々な「ひと」が体験・交流・活動できる持続可能な魅力あるまちづくりを進め、沼田ならではの取組を世界に発信することで、交流人口・関係人口の拡大を目指します。

<方針>

- ① 移住定住の促進
- ② 関係人口の創出・拡大
- ③ ゼロカーボンの推進

【基本目標3】子どもたちが帰ってきたくなる夢と希望と誇りのもてるまちづくりを目指す

将来子どもたちが沼田町に帰ってきて活躍し、国際社会をたくましく生きるグローバルな人材を地域ぐるみで育てていくため、沼田ならではの教育による地域学習と英語教育に取り組むとともに、様々な生きた経験を体験できるキャリア教育の充実を図り、また元気にのびのびと運動ができるよう、部活動の地域移行も含む町内スポーツ環境の充実を図ることによる本町独自の教育環境づくりを進めていきます。

子育て世代においては、子育て世帯に対する支援日本一を目指して、更なる子育て支援策の充実を行い、誰もが住んでみたい、住んでよかったと安心して子育てできるまちづくりを進めていきます。

<方針>

- ① 子育て環境の充実・支援、結婚への支援
- ② 沼田らしい教育づくり

【基本目標4】いつまでも安心して暮らし続けることが出来る住民福祉が向上するまちづくりを目指す

「住民福祉の向上」を基本として、人生100年時代を見据えた、「見守り環境の構築」や「歩いて暮らせるまちづくり」を進め、元気な高齢者がいつまでも活躍できる場づくりを目指します。

<方針>

- ① 地域包括ケアシステムの実現
- ② 公共交通の確保・維持
- ③ 農村型コンパクトエコタウンの実現

5 取組事例

①【基本目標2】の具体的な施策・事業「クラフトビール工場整備事業」

全国初となる公設民営クラフトビール醸造所「石狩沼田ブルワリー」を、新たな特産品としてクラフトビールを製造・販売し、「関係人口」「交流人口」の拡大により地域経済の活性化を図ることを目的に建設し、2025（令和7）年4月より醸造を開始しました。



石狩沼田ブルワリー

また、トナリエ北広島にアンテナショップとして沼田町BEER KITCHENをオープンし、石狩沼田ブルワリーで製造したクラフトビールや、特産品のトマトケチャップを使用したポークチャップやナポリタンなどを提供して、沼田町を多くの方に知っていただけるように取り組んでいます。



沼田町BEER KITCHEN



沼田町BEER KITCHEN

②【基本目標4】の具体的な施策・事業「あるくらす団地等におけるICT活用健康・見守り事業」

沼田町地域優良賃貸住宅「あるくらす団地」などに電力センサーを導入することで、入居者の健康づくり・見守り支援につなげて、QOLの維持・向上に寄与する取組を行っています。



電力データ共有の仕組み

電力センサーを自宅の配電盤に設置することで、家庭内の電気機器の使用状況を1分ごとに計測することができます。電力センサーにより得られたデータを基に居住者のライフスタイルを分析することで、居住者の健康状態などを間接的に把握することを可能とし、町民の健康増進及び予防に対する意識変容・行動変容、ご家族が遠隔で見守ることができる仕組みを提供しています。

本取組は2020（令和2）年9月に沼田町と奈良県立医科大学MBT研究所及びMBTリンク株式会社とで包括連携協定を結び専門的な知見を活かし事業を進めています。



包括連携協定書交換式

6 おわりに

沼田町では、町民全員が主体と想像力をもって地域の一体感をつくり出し、常に地域間の「競争」と「共創」を意識しスピード感を持ったなかで、「共創協働のまちづくり」を進めていきます。また、住民とともに参加型の地域づくりを行うことで、地方の小規模自治体における持続可能な事業運営と成長を実現し、子どもたちに帰ってきてもらえる「夢と希望と誇りの持てるまちづくり」の実現に向け、「夢とやさしさにあふれる小さな町の大きな挑戦」をスローガンに「オールぬまたで輝かそう！ぬまたの未来」を合言葉として、町民皆様と100年後を見据えたまちづくりに取り組みます。

「おいしい」から広がる～ 酪農家のお母さんの知恵と笑顔

農村生活文化伝承活動を進める会

会 長 池田 佐代子さん (いけだ さよこ)

副会長 長尾 きよ子さん (ながお きよこ)

会 計 本間 美 嘉さん (ほんま みか)

農山漁村における地域の活性化や、個性的で魅力ある地域づくりの優れた活動を紹介するシリーズ。

今回は「わが村は美しくー北海道」運動第7回コンクールで特別賞を受賞した「農村生活文化伝承活動を進める会」の皆様にお話を伺いました。

《イタドリとの出会い》

豊富町は、北海道の北部に位置し、人口よりも圧倒的に乳牛の数が多く「牛乳のまち」です。また、日本最北の温泉「豊富温泉」があり、奇跡の湯治場として知られています。

始まりは昔ながらの農村文化を次の世代に伝えたいという想いからの活動でした。昔、青森からお嫁に来られた方の地域では、イタドリをフキの代用に食していたことから、「豊富町にたくさんあるイタドリで何かできれば」と考えたのが始まりで、もしこのアイデアがなかったら、イタドリの加工品も、この活動もなかったかもしれません。当初は各地区で個々に収穫し、塩蔵したものを持ち寄って調理や伝承展を行っていました。平成14年、会員同士で手作りの「工房」を立ち上げたことをきっかけに、収穫から下処理、塩蔵まで会員全員で協力して行う体制が整いました。

《5月が勝負！》

毎年5月20日前後、会員の長年の経験で日程を決めて収穫します。イタドリは一晩で一気に10センチも伸びるため、固くなる前に刈り取ります。収穫したイタドリは、一本一本しっかりと状態を見極めながら、すべて手作業で行います。このような丁寧な手作業こそ、イタドリの美味しさを支えています。



イタドリの下処理・塩蔵作業



《世代を超えて集う憩いの場》

現在、酪農家のお母さんたちを中心として約15名で、最高齢の90歳代から30歳代の若手まで幅広い世代で活動しています。定期的な集まりはありませんが、イベントが近づくとみんなで集まりワイワイと相談しながら活動を進めています。

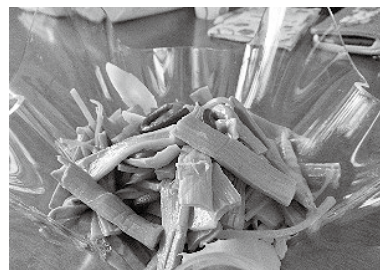
《食を通じて地域とつながる》

年に3～4回、伝承展や豊富町観光協会と協力し、ランチ会などイベントに参加します。伝承展は今年43回目を迎えます。毎年、自慢のイタドリの加工品や焼き菓子を提供したり、90歳代のお母さんが真心を込めて育てた美味しい野菜も並び、多くの人で賑わいます。また、地元のお母さんたちを対象に、漬物講習会や保存食の料理教室を開催しています。「どうやって食べるの?」と聞かれば、山菜の食べ方や食の魅力を伝えています。声をかけてもらえれば、どんどん協力していきたいと思っています。

集まって活動するのがとにかく楽しいし、先輩のお母さんたちからいろんなことを教えてもらい、そして次の世代へつないでいく。いろんな人と話ができることが、私たちの一番のパワーになっていますと素敵な笑顔でお話してくださいました。豊かな自然の恵みと先人の知恵、イタドリの加工品には、お母さんたちの情熱がギュッと詰まっていました。



マスコットキャラクター
大地くん



イタドリの和え物

当協会ホームページ、「わが村は美しくー北海道」運動第1～9回受賞団体の活動概要をまとめた冊子『生産空間の活性化に資する地域事例集』をご覧ください。



美しい形に認定された 石狩の山

ピリカノカはアイヌ語で美しい形という意味である。国の文化庁はアイヌ文化に関連する史跡名勝天然記念物の名称をピリカノカと名付け、北海道内の山や岬など10ヶ所を指定している。黄金山^{こがねやま}はその名勝の一つだ。（アイヌ語ではピンネタイオルシペという）黄金山は美しく形が整った円錐形^{えんすい}で、黄金富士または浜益富士とも呼ばれている。

この黄金山の存在を知ったのは随分前だ。黄金山に毎年登っているアイヌのおじさんと夫が仲良くなり、一緒に登山に行くようになってからだ。あらためて調べてみると、標高約739mの山で、地上350mあたりから上になるとさまざまな岩石の地層が見える。頂上まで岩になるので登りも下りも足場が大変だったと夫が言う。しかし低山でありながら季節には高山植物が咲き、山頂からは360度見渡すことができる素晴らしい眺め。きっと黄金山には何度も登りたくなる、いろいろな魅力が詰まっているに違いない。

ある年、小学生だった娘も黄金山に登ったことがある。「山の小学校」に通っていたせいか、夫の手助けもあり、へこたれることなく楽しんで帰ってきた。その後10年以上経って四国の石鎚山^{いしづちさん}にも夫と娘で登山に行っている。この時、すでに夫は体力的に娘に抜かされたようだ。

数年続いた夫の黄金山登山に私は仕事の忙しさに追われていたことで、一緒に行くことは叶わずにいた。もっとも私としては、山は登るより眺めて絵に描きたいのであった。





すずき もも

イラストレーター・絵本作家／スローフードさっぽろ会員

東京生まれ、北海道夕張育ち。広告や雑誌、カレンダーなどのイラストを描くほか、イラストで綴る町案内の本や絵本などを執筆。ほか、「スローフードさっぽろ」を2016年に立ち上げ、食を中心に環境や暮らしの大事に取り組んでいる。著書に絵本「はるとなつ はたけのごちそうなーんだ？」（アリス館）「おいしい大地、北海道」（イースト・プレス）がある。近著に絵本「はたけのごちそうなーんだ？くだもの」（アリス館）がある。モットーは4つのS。「Simple, Slow, Small, Smile:ささやかに、ゆっくり、ほどほどに、にこにこ」。

ガストロノミックツーリズム in 北海道

～食と文化の観点から地域を見つめ、北海道を学ぶ旅～

第14話 「胆振」

遊佐 順和 (ゆさ よりかず)

公立大学法人旭川市立大学 地域創造学部地域創造学科 教授

東京都出身。北海道大学大学院教育学専攻修了。大学卒業後、日本フィルコン株式会社、池協会計事務所、AIR DO北海道国際航空株式会社、株式会社ホテルオークラ札幌などの勤務を経て、2010年より札幌国際大学に奉職し、2025年より現職に就く。本務の傍ら、内閣府地域活性化伝道師、北海道住宅供給公社理事、旭川市工芸センター運営委員会委員、旭川市国際交流委員会委員長、一般財団法人北海道開発協会評議員、一般社団法人和食文化国民会議全国「和食」連絡会議「和食」地域特派員なども兼務する。



今回は北海道中南部に位置し、太平洋に面して東西に広がる胆振管内のなかから苫小牧市、白老町および室蘭市をご紹介します。管内には北海道の海の玄関口として本州と道内を結ぶフェリー航路と全国トップ3に入る規模の取扱貨物量を誇る苫小牧港、空知地方で採掘された石炭の積出港を担った歴史をもつ室蘭港を擁しています。さらに、胆振は新千歳空港に隣接し、鉄道や高規格道路など交通の要衝であるロケーションを生かし多様なものづくり産業が集積しており、温暖な気候にも恵まれ海山の幸も多い地域でもあります。

製紙工場が築いた企業城下町“苫小牧”

胆振管内の中核都市・苫小牧市では、1910（明治43）年に操業開始された王子製紙株式会社苫小牧工場が、わが国最大の製紙工場としてまちの経済発展を大きく牽引し、企業城下町を形成してきました。国内外から高い評価を受ける関連会社の王子サーモン北海道工場直営店では、近年カフェコーナーを設け、できたての

スモークサーモンやワインを味わうこともできます。
老舗菓子店「三星」は、創業時は苫小牧駅近くにあります。周辺には王子製紙の丸太積み作業所がありました。初代社長が苫小牧ならではの菓子創りを模索するなか、丸太作業現場で労働者が丸太に括りつけた網を引き揚げる際のかけ声「よいとまいたァ」をヒントに、ロール状に巻いたカステラを丸太に見立て、苫小牧や勇払原野に自生するハスカップをジャムにしてお菓子塗りした銘菓「よいとまけ」が誕生しました。この銘菓には地域の産業と豊かな恵みが表現されています。



王子製紙苫小牧工場
まちのシンボル200mの集合煙突



有明町2丁目 王子サーモン北海道工場直営店
「店舗外観、北海道大雪サーモンのフリップ、店内イートイン」



糸井141 三星「銘菓よいとまけ、本店でのイートイン」
（銘菓よいとまけ写真提供：株式会社三星 企画広報課）

豊かな文化薫る正統派の老舗洋食堂

苫小牧には、2019（令和元）年8月に創業100年を迎えた老舗洋食堂「第一洋食店」があります。同店は王子製紙苫小牧工場創業による苫小牧の近代化と歩みを重ね、市内に初めて洋食文化を広めました。2019（令和元）年7月16日～9月16日、苫小牧市美術博物館で同店100年の歩みが特別展として紹介されました。創業者の山下十治郎氏は横浜グランドホテルで修業を重ね、フランス料理の原点を研鑽後、札幌の豊平館や苫小牧の王子倶楽部の料理人として腕を振るった後に、独立開業されました。現在三代目店主の山下明氏は、創業時からの味を料理レシピではなく、舌やソースの色で覚えた味を今日まで受け継いでいます。同店看板メニューのビーフシチューは、仕込み段階から2週間あまり時間をかけて調理されたもので、口の中でとろける牛頬肉はほかの店では味わえない絶品です。正統派の各種料理に加え、多くの文化人がデザインした民芸調の設え、格調の高い椅子やテーブルなどの什器やMENUに至るまで、審美眼が磨かれる至高の空間で贅沢なひとときがゆっくりと紡がれます。



錦町1丁目 第一洋食店「苫小牧市美術博物館「特別展ポスター」、看板メニュー ビーフシチュー、MENU、格調高き店内設え」
※ レトロで落ち着いた佇まいと、歴史の厚みを感じる店内

全国一のホッキ貝水揚げ量を誇る苫小牧では、漁港近くの食堂でホッキカレーを看板メニューにする店が立ち並び、行列のできる店舗もあります。港の近くで静かに佇むビルの一角に、若き店主末永健太氏が営む心とみ落ち着く喫茶店「豆の木」があります。同店は1975（昭和50）年に健太氏の伯父が開業した店を祖母と母が譲り受け営業されていましたが、一度閉店して別な店舗が入っていた店を、2023（令和5）年暮れに健太氏が母たちの想いを継ぎ10年ぶりに再開した、若き店主の熱い想いと柔らかな温かみが溢れる素敵な店です。



汐見町1丁目 喫茶豆の木「店舗外観、珈琲豆のオブジェ」

北海道を代表するブランド牛のまち“白老町”

胆振管内のほぼ中央に位置する白老町は、風光明媚な景観と豊かなブランド食に恵まれたまちです。2008（平成20）年7月開催の「北海道洞爺湖サミット」では日米首脳会談後の晩餐会に利用され、全国的に高い評価を得るブランド牛「白老牛」が注目を集めています。このほか前浜で水揚げしたスケトウダラを新鮮なうちに加工する「虎杖浜たらこ」や、鶏卵なども代表的な特産品となっています。町内には牧場に焼肉レストランを併設し、和牛の生産から加工品製造、飲食店での提供まで6次産業化に取り組む生産者も多く、生産現場で新鮮な和牛をじっくり堪能することができます。



栄町1丁目 和風炭火焼きステーキハウス 牛の里
「店舗外観、焼肉セットの白老牛」※ 町内牧場で生産された新鮮な和牛を、JR白老駅から歩いて行ける店舗で食事や購入ができます

白老ならではの「食」を通じてまちの豊かさを体感

まちなかに、永年にわたり多くの町民がこよなく愛し、非常に個性的な居酒屋「ファミリー居酒屋 河庄^{かわしょう}」があります。先代河崎光典氏^{かわさきみつのり}が野山に分け入り、自ら採取した山菜や川魚を調理する滋味豊かな料理^{みくにゆたか}が食卓に上ります。現在は顧客だった三国豊夫妻が店を事業承継し、先代の味を多く引き継ぐとともに新たなメニューも創作し、多くの利用者から愛されるまちの銘店として白老の食の豊かさを表現しています。河庄の近くには、2009（平成21）年に地元の高齢者が開業した「しらおいグランマ」があります。現在は、海外在住歴^{はやしけいすけ}があり、さまざまな経歴をもつ林啓介氏がオーナーとなり、スタッフのみなさんが永年の生活経験と知恵を存分に発揮され、地元の海山の幸がもつ美味しさを引き出し、真心こもる調理によりほっこりと心温まる美味しい料理の提供や、大漁旗のリメイク品が販売されています。

このほか、たらこと温泉名所として知られる白老西端の虎杖浜には、高台に名湯と地元産の幸を堪能できる銘宿があります。大海原を見つめ都会の喧噪^{けんそう}を忘れ、心洗われ非日常の至福のひとつを紡げる湯宿です。



大町2丁目 ファミリー居酒屋 河庄
「店舗外観、天然きのこ16種の名物料理「きのこ鍋」」
※ 山菜、川魚、鍋など、ここでしか味わえない数々の味があります



大町3丁目 しらおいグランマ「野草茶（よもぎ、どくだみなど11種類の山野草のお茶）、地元産食材で作ったお弁当のおかず、林オーナー企画 ノンシュガー生チョコレート（ハチミツ、イチジクなど4種）」



虎杖浜289 心のリゾート 海の別邸ふる川
「施設外観、料理長が渾身の想いで造る舟盛り」
※ 欧州大使館で腕を振るった経歴をもつ三浦料理長

日本の近代化に貢献した産業のまち“室蘭”

室蘭は1872（明治5）年に室蘭港開港、1892（明治25）年に鉄道開設、1894（明治27）年に特別輸出港の指定を受け、空知地方からの石炭積出港として栄え、北海道、日本の近代化に大きく貢献し、関係諸施設は日本遺産「炭鉄港」の構成文化財となりました。現在、室蘭は製鉄・鉄鋼など重化学工業が盛んな「ものづくりのまち」として、道内の代表的な港湾、産業都市の一つとして栄えるとともに、近年は「工場夜景」やドラマや映画のロケ地としても注目を集めています。炭鉄港の構成文化財の一つでもある「旧室蘭駅舎」は、1912（明治45）年に建てられた道内最古の木造建築の駅舎で、このほかにも市内には地場産業で栄えたまちの記憶を物語る趣深い建築物が点在しています。



海岸町1丁目 旧室蘭駅舎
※ 国登録有形文化財



測量山展望台からの眺望
日本製鉄の製鉄所室蘭地区

炭鉄港めしと老舗銘店を歩き紐解くまちの食文化

室蘭には永年にわたり製鉄所で働く労働者に愛され、まち独自の名物グルメとして広まった「室蘭やきとり」があります。名前はやきとりですが、肉は鶏ではなく豚肉が使用され、豚肉と相性の良い玉葱^{たまねぎ}が間に挟まれ、甘辛いタレを絡めた串に洋辛子をつけていただきます。もう一つ、室蘭ならではのグルメとして濃厚なスープの「カレーラーメン」があります。室蘭地域の半数以上のラーメン店がご当地ラーメンとして提供し、さらなる普及と室蘭の活性化に向けて、2006（平成18）年に「室蘭カレーラーメンの会」が発足されました。

室蘭港の開港以来、長い歴史を刻んできた中央町には、創業100年を超え歴史の厚みと情緒を感じる老舗の飲食店や菓子店があります。まちなかの歴史的建造物や老舗店を見つめながら商店街を歩いていますと、かつて百貨店があり商店街も大賑わいだったころの面影を醸して趣深く佇むレトロな純喫茶や、店名にかつての町名を付けているカフェもあり、賑やかな室蘭の往時に想いを馳せながらまち歩きを楽しめます。



中央町2丁目 鳥辰本店

「店舗外観、炭鉄港めし 室蘭やきとり※」

※ 豚肉に玉葱を挟み甘辛タレを絡めた豚串を洋辛子でいただく今や全国的に知られる「室蘭やきとり」は、2026年2月文化庁より地域に根ざす食「100年フード」に登録されました



中央町2丁目 味の大王本店

「店舗外観、炭鉄港めし「カレーラーメン」」

※「室蘭カレーラーメンの会」味の大王本店 店主小柳富資氏が市内の店主たちに声がけ、北海道第4の味を目指して発足されました



中央町2丁目 純喫茶すずや「店舗外観、店内設え」

※ 往時の面影を感じる優雅な設えのシャンデリア



中央町2丁目 天勝本店「店舗外観、絶品の天井」

※ 1920（大正9）年創業、市内の老舗飲食店



中央町2丁目 大町カフェ「店舗外観、珈琲」

※ 店名に旧町名「大町」の名残ある街角の喫茶店



中央町2丁目 富留屋本店「店舗外観、各種銘菓」

※ 1898（明治31）年創業、市内最古の老舗菓子店

創業当時から続く「蝦夷の華（昆布菓子）」はじめ、永年続く多くの菓子があります（各種銘菓の写真提供：お菓子の富留屋）

【連載】

北のサクラ

彩る

歴史と文化

第2回



伊達、厚岸、根室の名木

森林インストラクター

小沢 信行 (おざわ のぶゆき)

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として小樽、釧路、函館などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。2016年森林インストラクターの資格取得。現在、日本森林インストラクター協会会員、道新文化センター講師。

道内の古い寺院を訪ねると、由緒ある名木に出会うことがあります。伊達市の善光寺、厚岸町の国泰寺、根室市の清隆寺では、サクラが長い間、大切に育てられてきました。花をめぐる習慣は地域に浸透し、今ではその土地ならではの個性的な桜まつりが開かれ、地元へ活力を与えています。

伊達の石割桜

風光明媚な伊達市の有珠湾を望む善光寺。裏山の善光寺自然公園を含む一帯は、有珠山の山体崩壊による大量の岩石で覆われています。

善光寺から公園内の坂道をのぼり、しばらく進むと、大きな岩を切り開いて勢いよく伸びるエゾヤマザクラに遭遇します。「石割桜」と呼ばれる北海道記念保護樹木です。その案内板にはこう書かれています。

「文化4（1807）年蝦夷地近海にロシア船が現れた際、『たとえ敵の砲丸に倒れることがあっても捕らえられて辱めを受けてはならぬ』と里人を諭し、処々に仏幡をたてて守らしめたという奇僧・二世鸞洲上人が石を割るくらいの強靱な心をもってがんばろうという気持ちで込めて植えたものです」

江戸幕府はロシアの南下政策に対処するため、蝦夷地に幕府直轄の寺を配置し、布教活動を通じて人心の掌握に努めました。その一つ善光寺は1804（文化元）年に建立され、様似町の等澗院、厚岸町の国泰寺と

もに「蝦夷三官寺」と呼ばれました。

石割桜はその姿から尊い木とされ、寺周辺のサクラは「有珠のサクラ」として次第に知名度を増していきます。

人気が飛躍的に高まるのは鉄道の開通後です。1928（昭和3）年9月に有珠駅が開業すると、室蘭から簡単に行けることから、1929（昭和4）年の花見は盛大なものとなります。



善光寺自然公園の「石割桜」

同年5月19日の日曜日は室蘭発有珠行きの臨時列車が運行し、往復2割引きの切符が発売されました。また、有珠駅から善光寺までの足を確保するため、民間会社が善光寺前に車庫と待合所を新設、自動車5台で輸送にあたりました。

さらに、室蘭からは料亭の出店が相次ぎます。境内では酒、ビールのほか、弁当やそば、おでんなどを販売。会場に芸者を待機させ、宴会に派遣する店もありました。

室蘭毎日新聞は「桜の名所として全道随一とまで謳はれるに至った」（1929年5月19日）と評しています。

有珠のサクラを象徴する石割桜が道の記念保護樹木に指定されたのは1972（昭和47）年。1978（昭和53）年にはエゾヤマザクラが伊達市の木に選定されます。こうした流れを受け、市は善光寺の裏山9.4㍍を借り1979（昭和54）年、善光寺自然公園を開設します。

樹齢200年とされる石割桜は腐食が進んでいましたが2001（平成13）年、腐食部分を削って特殊な樹脂剤で埋める外科治療を実施。3年目からは花の数が増え、根元からは代替わりとなる幼木が伸びています。

境内にはエゾヤマザクラやソメイヨシノ、シダレザクラなどが植えられています。花見を盛り上げようと2022（令和4）年から、地元の実行委員会が「有珠善光寺桜まつり」を開催、キッチンカーなどの出店が並び、訪れた人たちを楽しませています。



いろいろなサクラが見られる善光寺境内

厚岸の老桜樹

蝦夷三官寺の一つ、厚岸町の国泰寺には、「老桜樹」と呼ばれる老木があります。1830（天保元）年ごろ、寺の改修に際し、厚岸場所請負人の山田文右衛門が奥州石巻（現宮城県石巻市）から移植したと伝えられる高さ約10^{メートル}、幹周3^{メートル}のオオヤマザクラです。場所請負人はサケ、マスなどの海産物を売買する権利を持つ者で、取引額に応じて税金を松前藩に納めていました。



国泰寺の「老桜樹」

以来、寺で花見が行われるようになり、歴代住職の記録「日鑑記」には、1862（文久2）年、来客にサクラの下で酒を出したり、地元役人宅の婦女子が見物に訪れたりしたと書かれています。

大勢集まるようになるのは第13世の住職が就いた1902（明治35）年以降。境内に風雲閣という建物を建て、地方の名士らを招いて観桜させたのが始まりといわれています。

厚岸のサクラ植栽に貢献したのは上田勘兵衛です。漁業家の勘兵衛は大正初期（1912年以降）、私財を投じ、近隣の山からサクラの若木を掘り出し、街に移植しました。

大黒島での作業には大勢の人夫を使い、崖から海へ吊り下ろし、はしけに載せて海上を輸送。陸揚げ後は馬車で搬送するという重労働でした。

国泰寺や厚岸神社、正行寺、元役場などさまざまな場所に植え、手入れも怠りませんでした。馬車の時代、勘兵衛自ら道に落ちた馬ふんを集め、サクラの根元に肥料代わりに埋めて歩きました。

1917（大正6）年12月の鉄道開通以降、花見客が遠方から大挙して訪れるようになります。国泰寺では翌年、観桜会を盛大に開催するため、施設を一部修繕し、近隣の名士約500人に招待状を送りました。

花の見頃の5月18、19日は土曜、日曜と重なり、釧路からの列車は満杯。ダイヤの都合で一泊する人が多く、旅館は満員、飲食店も大繁盛でした。

その後、映画「ゴジラ」のテーマ曲で有名な作曲家伊福部昭さんが、この地でサクラの新種を見つけます。北海道帝国大学（現北海道大学）農学部を卒業した伊福部さんは1935（昭和10）年、厚岸森林事務所に林務官として赴任しました。

「厚岸では『アッケシザクラ』という新種のサクラを発見したことも忘れられない思い出です。場所は国泰寺の付近で、北大の館脇操さんが新種と認めて、二人の名が付いています」（北海道新聞1985年4月3日夕刊）と回顧しています。

1936（昭和11）年、同学部の館脇助教授が新種と認定し、林業雑誌に掲載しました。現在はオオヤマザクラの変種だとして、和名も2人の名前が付いた学名も使われていませんが、伊福部さんと厚岸のサクラとのかかわりを示す貴重な資料です。

戦後、花見のメイン会場は子野日公園へと移ります。元町長の子野日弘毅が所有し「翠湖園」と称していた土地を町が1962（昭和37）年、親族から譲り受け、エゾヤマザクラを移植、多くの町民が憩える場にしました。

花見客がさらに増えるのは、1972（昭和47）年9月の厚岸大橋開通がきっかけです。それまで鉄道や国道が通る湖北地区と国泰寺や子野日公園のある湖南地区は厚岸湖の湖口で分断され、両岸を行き来するにはフェリーが欠かせませんでした。

橋の開通で往来が簡単になり、翌年の桜まつりには釧路からマイカーが押し寄せ、日曜日は朝から国道が渋滞。橋の周辺は6*にわたって身動きがとれなくなりました。厚岸署員は交通整理、役場職員は駐車場への誘導にあたりましたが、2万人の花見客に終日振り回されました。

1950（昭和25）年に始まった「あっけし桜まつり」は2004（平成16）年、牡蠣まつりの要素を加え「あっけし桜・牡蠣まつり」となります。厚岸の2枚看板がそろい、祭りの魅力が一段と増しました。



にぎわう「あっけし桜・牡蠣まつり」

根室のチシマザクラ

気象庁がサクラの開花を観測する標本木は全国的にはソメイヨシノですが、寒冷地の北海道はエゾヤマザクラが大半です。そんな中、根室だけは、観測が終了した2010（平成22）年まで全国で唯一、チシマザクラでした。

分類上はタカネザクラの変種です。根元から幹が分かれ、枝が横に広がり、高さは3～5メートルで、エゾヤマザクラのように大きくはなりません。寒さに強く、自生地は本州中部以北の高地や千島列島などです。

チシマザクラと命名したのは植物学者で後に札幌農学校（現北海道大学）教授となった宮部金吾^{みやべ きんご}です。1884（明治17）年、千島列島の択捉島^{えとろふとう}で採取し、「千島植物誌」という学位論文に記載する際、この名を付けました。

根室では1869（明治2）年、地元の大工^{くなしりとう}が国後島から持ち帰り、自宅に植えていましたが1903（明治36）年、檀家^{だんか}だった縁から清隆寺に寄贈し以来、境内で大切に育てられてきました。



清隆寺のチシマザクラ

1945（昭和20）年7月の米軍機による大空襲は、市街地の8割が焼失、死者400人という大惨事となりました。火の手は寺の近くまで迫りましたが、幸い難を逃れチシマザクラも生き延びました。

戦後、チシマザクラを根室のシンボルとするため、市や千島桜保存会が苗木の普及活動に取り組み、清隆寺の樹木を親木として、市役所や裁判所などの公共施設や民家にも植えられています。

1969（昭和44）年には根室市の木に選ばれ、1973（昭和48）年には清隆寺の木が道の記念保護樹木に指定されました。

一方、千島列島ゆかりの桜であることから、「望郷桜」として北方領土返還運動にも貢献しています。1992（平成4）年には市内の老人クラブが採取したチシマザクラの種を「千島桜咲かそうメール」として地元の郵便局から全国に発売しました。

2003（平成15）年には北方領土復帰期成同盟が返還要求運動の象徴としてチシマザクラを公募で選び、花をモチーフにしたイラストを啓発活動に使用しています。

こうした中、根室ではエゾヤマザクラを活用した森づくりも進んでいます。明治公園では2006（平成18）年の強風で倒木被害に遭ったカラマツ林を「さくらの森」に再生する事業が翌年から始まりました。

4年間で約700本のエゾヤマザクラが植えられ、園内の既存の桜も新しい景観を創出するため、サイロ広場に移植されました。

同公園は開拓使の牧場跡地で、サイロ広場には赤れんが積みのサイロが3基あり、国の登録有形文化財に指定されています。

2021（令和3）年からは桜の開花時期にサイロをライトアップする催しが始まりました。市と観光協会の主催で、桜とサイロが春の夜空に浮かび上がる仕掛けです。「日本一遅咲きの桜」をうたう根室のユニークな取り組みです。



ライトアップされる明治公園のサイロ

<主な参考資料>

- ・伊達郷土史研究会編「伊達の風土を歩く」伊達郷土史研究会、2022年
- ・伊達市史編さん委員会編「伊達市史」伊達市、1994年
- ・厚岸町史編さん委員会「厚岸町史 下巻」厚岸町、1975年
- ・厚岸町史編集委員会編「新厚岸町史 資料編2」厚岸町、2009年
- ・厚岸町教育委員会編「古老が語るあつけし昔ものがたり 第2集」厚岸町教育委員会、1992年
- ・土屋広志「厚岸の名木特選」『朱化石 厚岸文庫 その一』厚岸を考える会、1985年
- ・文部省「天然記念物調査報告 植物之部第十八輯」文部省、1938年
- ・宮部金吾著、宮部金吾博士記念出版刊行会編「宮部金吾」大空社、1996年
- ・根室市役所「広報ねむろ」2010年7月号、2024年7月号

北海道の植物化石



成田 敦史 (なりた あつふみ)

北海道博物館 学芸員、士別市立博物館 特別学芸員

1984年北海道生まれ。千葉大学理学部地球科学科卒、北海道大学大学院農学院修了。2021年度まで高等学校教諭として勤務しながら、学術研究を継続し、2020年に博士号取得。2022年より現職。北海道産の植物化石の調査研究を行いながら、地学の市民教育にも力を入れている。博士(理学)。専門は古植物学。

植物の化石？

読者の皆さんは「化石」と聞いてどんなことを思い浮かべますか？発掘するもの、恐竜、アンモナイト、子どもが好きそう、というようなイメージでしょうか。今から皆さんにお伝えするのは北海道から見つかっている植物の化石のお話です。なんだ、恐竜じゃないのか、そもそも植物も化石になるのか、植物は昔から何も変わっていないんじゃないか、と思うかもしれませんが。筆者は植物化石を使って地質時代（化石が見つかる大むかしの時代）の植物の姿や進化、環境などを調べる学問である「古植物学」を専門としています。今回は北海道産のものを中心に植物化石のおもしろさ、古植物学のおもしろさをお伝えします。是非先入観をもたずにお読みください。

身近な植物が今に至るまで ～イチョウを例に～

私たちの身の回りには意識するかどうかはさておき、たくさんの植物が存在しています。多くの皆さんにとって最も身近な植物の一つが落葉性の裸子植物イチョウ *Ginkgo biloba* (図1) でしょう。公園の樹木や街路樹として知らない方はいないはずですし、イチョウ並木も北海道大学などにあります。実はこのイチョウという植物は本来日本



図1 現代のイチョウの葉

に自生する樹木ではなく、中国原産の樹木でした。日本への伝来の正確な時期については諸説ありますが、鎌倉時代から室町時代にかけて、禅僧が中国から持ち帰ったとされています。防火樹として、あるいは寺院に植える神聖な樹木として、またはイチョウの実(銀杏)を食用にするため、などの用途で日本各地で植栽されたようです。そん

なイチョウですが、世界各地で見つかる化石から、恐竜の生きていた中生代という時代(図2)に北半球を中心に大繁栄した植物(厳密には現生種のイチョウとは異なる種です)だったことが知られています。日本各地でもイチョウ類の葉の化石が見つかっています。北海道でのイチョウ類の化石の報告は多くはありませんが、士別市や夕張市など北海道でも化石が見つかることから(図3)、中生代白亜紀の北海道にイチョウ類が生育していたことが推定されています。そ



図2 地質年代表(点線枠は北海道で見つかる時代)



図3 イチョウ類の葉化石。北海道士別市の白亜紀の地層から産出した(士別市立博物館の展示標本:登録番号14563)

その後、イチョウ類の化石の産出数は少なくなっていき、約100万年前ころを最後に日本列島から姿を消したことが推定されています。イチョウ類は化石から複数の種類が存在していたことも知られていますが、現代のイチョウ *Ginkgo biloba* だけが中国に残りました。そのイチョウがヒトの手によって中世の日本にやってきて、日本中に広がっていったという経緯があるので

す。このように、身近な植物にも今に至るまでの歴史があり、それを知るための直接的な証拠となるのが植物化石なのです。最近はDNAや分子の解析から植物の進化を解き明かす試みもあるのですが、最終的には化石という直接的な証拠を調べる必要があります。

植物化石は大むかしの気候も物語る

かつて筆者が高校教諭だったころ、授業中に生徒から「植物も化石になるとは知らなかった」などという聞き捨てならないことを耳にしたこともありました。少なくとも現在の日本の教育課程では、中学校理科において、示相化石を学習することになっています。示相化石とは、その化石を含む地層がどんな環境でできたのかを示す化石のことです。示相化石の例として、ブナやカエデ(図4)の葉の化石が見つかった場合、



図4 カエデのなかま (*Acer protojaponicum*) の葉化石。北海道北部士別市の新第三紀の地層から産出した(著者蔵)

その地層は涼しい気候下で堆積したことが推定できる、と学習することになっています。これは現代のブナやカエデのなかまが冷温帯気候下で生育していることをもとに推定しているのです。このように、植物化石が地質時代の陸上の気候を示す重要な化石で興味深いのですが、多くの中高生のハートを掴めるような学習内容ではなかったようです。

上記のような気候の推定は、実は慎重に行わなければならないものですが、いずれにしても植物化石は地質時代の陸上気候の指標であることは間違いなく、北海道内からも多数発見される植物化石から、約1億年前から現代に至るまでのおよその気候変化が調べられています。

ちなみに植物化石から大むかしの気候を調べるときに、涼しい気候だった、のようなざっくりしたことはわかりではありません。多数の葉の化石から構成される植物化石群のうち、解析に必要な条件さえそろえば、地質時代の年平均気温が具体的に何℃で、降水量が何mmだったのか、という計算もできます。植物化石を使えば地質時代の陸上の気候条件がこれほどまでに具体的に明らかにできるということは大変驚きなのではないでしょうか。

様々なタイプの植物化石

様々なタイプの植物化石

植物の化石のうち、最も多く目にするのが葉の化石です。葉の化石は、現代の押し葉・押し花と同じように、圧縮されてペタンコになった状態で地層中に保存される圧縮化石(炭化化石:図5左)や、葉の輪郭やすじ(葉脈)が地層中の岩石に足跡のように残された印象化石(図5右)として見つかります。条件さえ



図5 ムカンカンバ (*Betula protojaponica*) の葉化石。左が圧縮化石で右が印象化石。北海道上士幌町ぬかびら源泉郷の新第三紀の地層から産出した(著者蔵)

よければペッタンコにならない状態で立体的に炭化石として保存されたまつぼっくりや針葉樹の葉、さらには枝や幹などの材が立体的に保存されつつ、それらが鉱物の成分に置き換えられて残された鉱化石もあります。北海道では、恐竜のいた1億年前ころの中生代の多種多様な鉱化石が小平町や三笠市、夕張市などで見つかっており、その中には新属新種として公表されたものも多数含まれます。他にも肉眼では見えない花粉や孢子などの微化石、そして植物由来の有機物などの化学化石など、一口に植物化石と言っても様々な種類のものがあります。

ところで、陸上の植物はザックリ示すと、いわゆる“コケ植物”（背が低く維管束をもたない、地表や岩場に這いつくばって生育する植物。スギゴケやゼニゴケ、ツノゴケなど）、いわゆる“シダ植物”（維管束をもつが、種子をつくらず孢子で繁殖する植物。ワラビやゼンマイ、スギナなど）、裸子植物（種子をつくるが、胚珠が完全に包まれておらず、花びらのない花をもつ植物。イチヨウやソテツ、マツなど）、被子植物（胚珠が保護され、キレイな花びらをもつ花をつくる植物。サクラやブナ、カエデ、キクなど）があります。これらのうち、コケ植物は化石に残りにくく、北海道でも孢子などの一部を除くと化石の産出報告はありません。北海道では約1億年前ころの中生代白亜紀から現代に至るまで主にシダ植物、裸子植物、被子植物の化石が産出しています。

これらの化石を研究することで、約1億年前の中生代から現代に至るまで、どのような気候下でどんな植物がどんな植生をつくっていたのかがわかるのです。中生代から現代に至るまでの時代の植物化石がほとんど切れ目なく見つかるのは日本では北海道だけです。北海道はまさに植物化石王国と呼べるでしょう。

恐竜の見た世界？白亜紀の植物化石

それではここからは各時代で見ついている植物化石とそれらからわかる環境をご紹介します。北海道には、南北に走っている山脈付近に中生代の地層群であ

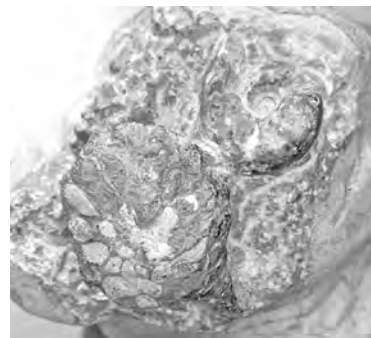


図6 アンモナイト化石(右上)とともに産出したナンヨウスギ属らしき球果(まつぼっくり)化石(左下)(北海道博物館の教育用標本)

る蝦夷層群があります。蝦夷層群はそのほとんどが海でできた地層なのですが、当時の陸上にいた植物の遺体が海に流されてきて、海の生き物であるアンモナイトと陸上の生き物である植物がともに重なり合うようにして化石化している状態を目にすることも多いです(図6)。蝦夷層群からは、シダ植物では、現代のヘゴ(木生シダの一種)のなかまや、裸子植物ではナンヨウスギのなかま(*Araucaria vulgaris*など: 図6)などの鉱化石が多数見つかっています。被子植物ではカツラに似たなかまの花序(*Obirafructus kokubunii*)やスズカケノキに似た葉(*Ettingshausenia cuneifolia*)の化石なども見つかっています。ヘゴのなかまは現代の日本では八丈島や屋久島よりも南に自生しており、ナンヨウスギのなかまに至っては、現代は南米チリなど南半球にしか生育していません。これらの事実から、白亜紀当時の北海道は熱帯に近い気候だった可能性も考えられます。現代の北海道とはまるで異なる気候、まるで異なる植生が広がっていたようです。北海道にいた恐竜たちもこのような植生を目にしていたのかもしれない。

石炭のもとになった？古第三紀の植物化石

北海道ではかつて夕張や釧路などに多数の炭坑があり、そこでは石炭が採掘されていました。石炭は変質した植物化石であると考えられていますが、北海道の石炭のもとになった植物の多くは、新生代古第三紀の植物でした。シダ植物ではコモチシダのなかま、裸子

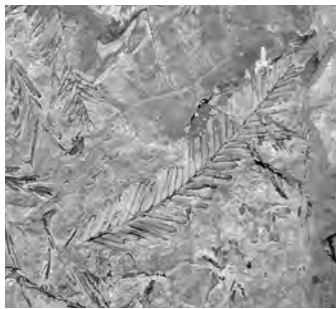


図7 メタセコイア(*Metasequoia occidentalis*)の葉化石。
北海道夕張市の古第三紀の地層から産出した(著者蔵)

植物では生きている化石として有名なメタセコイア(*Metasequoia occidentalis*: 図7)が多産しています。被子植物ではハンノキのなかまや、クリスマスフラワーとしてなじみの深いポインセチアに似たトウダイグサ科の植物(トウダイグサ科は南方系の植物です)なども見つかっています。ハンノキやニレのなかまなど、現代の北海道でもよく見かける植物も白亜紀に比べると多く見られるようになりましたが、それでも現代の北海道には自生しないグループの植物も多く、植生はやはり現代とは大きく異なっており、気候もまだ温暖だった可能性が高いようです。葉化石の計算からは、4,000万年前ころの夕張市の年平均気温は関東から近畿地方程度だったことが推定されます。古第三紀には恐竜は地球上から姿を消していましたが、北海道ではサイのなかまやリクガメの化石が見つかっており、これらの動物がメタセコイアなどの林の中で暮らしていたのかもしれません。

現代的な森林ができた！新第三紀以降の植物化石

新第三紀はダイナミックな時代でした。大規模な地殻変動により、それまでユーラシア大陸と陸続きだった日本列島が、大陸から分離し、ほぼ現代の位置まで移動してきた時代です。この時代は日本列島全体で寒暖の気候変化を繰り返しながらも、現代の植生の原型が形作られてきたことが植物化石から推定されています。1,300万年前には、ブナ(図8)やカエデのなかまを中心とした落葉広葉樹と、トウヒやモミのなかまを中心とした常緑針葉樹の混交林の植生が見られたこ



図8 アケボノヌブナ(*Fagus palaeojaponica*)の葉化石。
北海道士別市の新第三紀の地層から産出した(著者蔵)

とが考えられます。このころには年平均気温も10℃を下回るようになっており、気候的にも現代の北海道に近づいていったことが推定されます。それでも現代の北海道には見られないタイプの植物化石も見つかり、気候変化や地形の変化に伴って姿を消した植物や、逆に外部から北海道に侵入してきた植物もいたようです。なお新第三紀以降は、北海道内でも植生の地域差や、地形に応じた低地の植生、高地の植生、河畔の植生などが明瞭になっていき、現代の植生に近づいていきました。

植物化石からでしか見えない世界がある

このように地質時代の植生や気候、すなわち大むかしの陸上の景色は植物化石からでしか知ることはできません。植物化石から過去の景色とそれを取りまく気候がわかれば、今後の地球環境の変化、気候変化に伴って、植生がどのようなようになっていくか、などの予測にも役立つかもしれません。化石と言えどもどうしてもアンモナイトや恐竜などの動物化石を思い浮かべがちなのですが、地味に見える植物化石は身近な植物の由来や地質時代の景色を知るために重要ですし、今後の地球環境問題を考える上でも様々なことを考えさせてくれます。

道の駅を核とした観光振興



清水 瀬菜 (しみず せな)

熊本県熊本市出身。幼いころから親しんだ北海道に魅せられ、2024年に石狩市厚田へ移住。地域おこし協力隊として道の駅を中心にイベント企画や魅力発信に取り組む。地域の温かさに支えられながら、「厚田らしさ」を広める活動をしている。

【熊本からはるばる来たぜ北海道へ！】

私は熊本市で生まれ育ちましたが、幼いころから祖父母が北海道に住んでいたこともあり、長期休みには家族で北海道を訪れていました。雄大な自然や澄んだ空気に触れる時間は、私にとって特別でありながら、どこか身近に感じられるものでした。兄も北海道の大学に進学していたため、引っ越しの手伝いなどで訪れる機会も多く、北海道はずっと心に残る場所でした。社会人になってからは、プロバスケットボールチーム「レバンガ北海道」の試合観戦がきっかけで、年に2、3回は北海道へ旅行するようになりました。何度も足を運ぶうちに、「こんなに好きなら、いっそ住んでみてもいいのでは」と思うようになり、移住を意識し始めました。

移住を考え始めた当初、石狩市を訪れたことはありませんでした。しかし、「おためし協力隊プログラム」で初めて厚田を訪れた際、地域の皆さんの温かさや、海と山を一度に感じられる景色に心を奪われました。

夕暮れの海の色、11月に降る雪、自然に声をかけてくださる距離の近さ。そのすべてが「ここで暮らす自分」を想像させてくれました。

実際に厚田に住み始めて感じたのは、“ちょうどいい田舎”であることです。空港や札幌から極端に遠いわけではなく、車で30～40分走れば必要なものは揃う。夜は静かで、時間がゆっくり流れる。熊本では少し忙しくしてしまっていた私にとって、この穏やかな時間はとても心地よく、自分に合っていると何度も感じました。地域の方々が気さくに声をかけてくださる温かさにも助けられています。厚田は、何が好きで何が苦手なのか、どんな生き方をしたいのかを考える“自分と向き合う時間”をたくさんくれる場所です。地域の方と話すたびに、「この地域なら、自分らしく過ごせる」と感じています。

【地域おこし協力隊って何？】

実は、地域おこし協力隊として転職・移住することを、最初から考えていたわけではありませんでした。前職の上司から「北海道に行くなら、地域おこし協力隊という制度もあるよ」と教えていただいたことがきっかけで、初めて制度について調べ始めました。

地域おこし協力隊の募集サイトを調べるなかで、石狩市厚田が「道の駅を核とした集客や業務に関わる協力隊」を募集していることを知りました。これまでの経験を活かしながら地域の役に立てるのではないかと感じ、迷いながらも申込期限ギリギリで応募を決めました。

【道の駅石狩「あいろーど厚田」で待ってます！】

私のミッションは、道の駅を中心とした集客や業務に関わることです。発注や納品対応、レジや電話対応などの窓口業務を行いながら、日々多くの方と接しています。



道の駅石狩「あいろーど厚田」外観

着任1年目は、さまざまなイベントや研修に参加させていただきました。私は主に道の駅の商品販売を担当していましたが、イベントの場所や来場者の層を考えて商品を選ぶ大切さを学びました。一方的に売るのではなく、「お客様が求めているものを届ける」という視点が必要だと強く感じました。また、道の駅でイベントを開催するなかで、道の駅にお客様を呼ぶことの難しさも実感しました。SNSでの発信だけでなく、地域の方から関係各所にしっかりと声をかけることが大事だということも学びました。

道の駅内での販売は、特に夏場は農家さんが次々と新鮮な野菜を届けてくださり、店内が一気に活気づきます。納品された野菜を手に取りながら、お客様の手元に届く瞬間を思い浮かべる時間が、私にとってとても好きなひとときです。



新鮮野菜などの販売

そのような経験を重ねるなかで、今年6月の「恋人の聖地の日」に合わせて、「厚田展望台恋人の聖地20周年記念 竹あかりライトアップイベント」を企画しました。厚田展望台は北海道で最初に恋人の聖地に認定された場所で、プロポーズや前撮りの思い出が残る特別な場所です。そこに、私の故郷・熊本で見てきた竹あかりをともしたい。そんな思いから始まったプロジェクトでしたが、道の駅の全面協力もあり、無事に開催することができました。クラウドファンディングも実施し、目標金額には届かなかったものの、多くの方から温かいご支援と応援の声をいただきました。

準備にあたっては、熊本の竹あかり制作団体「CHIKAKEN」とオンラインで何度も打ち合わせを重ね、厚田でどのような雰囲気をつくりたいか、展望台のどこにどのように配置するかを丁寧に共有しながら進めました。実際に現地で設置作業を行った際には、動線や安全面を最優先に考え、事前の設計から

大きく変更する場面もありました。何度も位置を調整しながら、より安心して楽しんでいただける形をつくっていただきました。

竹あかりに^{あかり}灯りがともった瞬間、竹あかりが厚田の空気にゆっくりと溶け込んでいくようで、会場全体が柔らかな光に包まれました。風に揺れる竹の影、灯りを見つめる子どもたちの表情、写真を撮る観光客の笑顔。その光景を見て、この場所に灯りをともせたことが心から嬉しくなりました。自分の故郷の文化が厚田の景色と重なり、新しい形で輝いた瞬間でした。

今後も、道の駅外での出店や、道の駅を活用したイベントを企画し、厚田を訪れるきっかけづくりを続けていきたいと考えています。道の駅だけで完結するのではなく、関係各所と連携しながら地域に根差したイベントをつくっていくことが大切だと感じています。

【2年目の私、1年後の自分】

着任して2年目となり、現在は「道の駅の来客増」を第一に考えて活動しています。石狩市内の各機関とも連携しながら、市内を周遊していただけるようなPRにも力を入れていきたいと考えています。

また、今年ご縁をつなぐことができた熊本の皆さんとも協力しながら、石狩市をさらに盛り上げていけるよう取り組んでいきたいと思っています。自分の故郷と厚田がつながっていくことに、大きな可能性と楽しさを感じています。

地域の方々ともたくさんお話をし、自分自身とも向き合いながら、地域おこし協力隊の卒業後を見据えて日々の活動に取り組んでいきたいと考えています。厚田での経験を積み重ねながら、「この地域で自分にできること」を丁寧に探していきたいです。



厚田展望台恋人の聖地20周年記念 竹あかりライトアップ

「稚内の歴史的建造物と昭和100年記念事業」

稚内市歴史・まち研究会

稚内市には、明治時代に建造された「旧海軍望楼」や昭和初期に建造された「稚内赤れんが通信所」（正式名称：旧海軍大湊通信隊稚内分遣隊幕別送信所）など国境のまちを象徴するような歴史的建造物が現存しています。そのような国境のまちに残る歴史的建造物をととして、地域の活性化と周辺環境の整備に導くことを目的として、「稚内市歴史・まち研究会」は平成18年に発足しました。

令和7年度、稚内市歴史・まち研究会では、「稚内の歴史的建造物と昭和100年記念事業」と題して、これら歴史的建造物の保存、利活用を推進するとともに、戦後80年と昭和100年を記念し、近世以降の郷土の歴史に関する展示、講演、各種記念資料を作成し市民に配布するなど、下記の地域活性化事業を実施しました。

【「稚内赤れんが通信所」の一般公開と演奏会の開催】

毎年、「稚内市歴史・まち研究会」では、夏と秋に一般公開、冬に「平和祈念の灯り」の開催、春には「かた雪散策会」と季節ごとに年4回程度、「稚内赤れんが通信所」の一般公開を開催しております。

戦後80年と昭和100年にあたる令和7年は、一般公開において「稚内赤れんが通信所」のB棟に通信所に関する写真を展示するとともに、各種記念事業に取り組みました。

令和7年7月13日の一般公開では、稚内赤れんが通信所のB棟にて地域で演奏活動を実施している「問寒別室内楽団」による、演奏会を開催いたしました。当日は約60名の来場者の前で、素敵な音色を奏でていただき、その音色はB棟の高い天井まで響き渡りました。



稚内赤れんが通信所（A棟とB棟）



一般公開での演奏会の様子（R7.7.12）

また当施設は、太平洋戦争開戦時の真珠湾攻撃の電文「ニイタカヤマノボレ」を中継した施設と伝えられており、令和7年12月8日は、太平洋戦争開戦から84年目にあたりました。毎年、同施設では「平和祈念の灯り」として、施設内に約80基の灯籠に灯りをつけ、平和を祈念する事業を「稚内市歴史・まち研究会」と「稚内ユネスコ協会」を中心に実施しています。

令和7年は、市内のお絵描き教室の子どもたちが作成した平和の願いを描いた鳩や地球などの絵が描かれた31基の灯籠も点灯され、市民ら約50人とともに、平和を祈念いたしました。

【令和7年度「稚内赤れんが通信所」一般公開】

- ・第1回一般公開：令和7年7月12日（土）、7月13日（日）
- ・第2回一般公開：令和7年10月18日（土）、10月19日（日）
- ・平和祈念の灯り：令和7年12月8日（月）
- ・かた雪散策会：令和8年3月22日（日）



「平和祈念の灯り」絵付き灯籠の準備作業

【歴史講座の開催】

令和7年度は、「戦後80年・昭和100年－稚内の歴史を学ぶ、歴史に学ぶ－」と題して、稚内市教育委員会、稚内ユネスコ協会、稚内間宮林蔵顕彰会と協力しながら、稚内の近世の歴史や戦後80年に係る4つの講座を開講しました。講師には、各分野の5名の先生を招き、様々な視点で地域に関する理解を深めました。4つの講座には、稚内市民をはじめとして計121名の受講者があり、市民とともにそれぞれの先生から、新たな視点を学ぶことができました。稚内市歴史・まち研究会としても、今回先生方から教えていただいたことを、今後の活動に活かしていければと考えています。

・【戦後80年・昭和100年－稚内の歴史を学び、歴史に学ぶ－（近世編）】

① 5/17（土）15：00～16：30 「間宮林蔵がみた蝦夷錦の来た道」

講師：相原秀樹（元北海道新聞社編集委員）

② 6/28（土）15：00～16：30 「近藤重蔵の足跡」

講師：谷本晃久（北海道大学大学院人文学部歴史学講座日本史研究室教授）

③ 7/19（土）15：00～17：00

・第1講座「間宮林蔵と今井八九郎から宗谷の地図をたどる－その2－」

講師：佐々木利和（北海道大学特任教授/東京国立博物館名誉館員）

・第2講座「蝦夷・宗谷ロシアの関わり」

講師：岩崎奈緒子（京都大学総合博物館資料基礎調査系教授）

・【戦後80年・昭和100年－稚内の歴史を学び、歴史に学ぶ－】（戦後80年編）

④ 9/20（土）15：00～16：30 「記者がたどる戦争の実相」

講師：工藤俊悟（北海道新聞社記者）

※会場は、①は稚内市立図書館。

②③④は稚内市生涯学習総合支援センター風～る

【記念冊子と絵葉書の作成】

太平洋戦争開戦から70年にあたる令和4年、稚内信用金庫のコミュニティ誌である「JUSTNOW」の126号に、稚内赤れんが通信所とその再生に取り組む「稚内市歴史・まち研究会」が特集されました。それから4年が経過し、戦後80年が経過した令和7年、稚内信用金庫のご協力のもと、令和4年から令和6年までの当研究会の活動と市内やサハリンに残る戦争遺産を加え、再編集し「JUSTNOW特別号」として作成しました。

併わせて稚内赤れんが通信所の記念の絵葉書も作成し、赤れんが通信所の一般公開や歴史講座などを中心にして市民や関係者に配布しました。



稚内信用金庫コミュニティ誌 JUSTNOW特別号と絵葉書

【まとめ】

令和7年度は、稚内市歴史・まち研究会にとって市民とともに、「稚内の歴史的建造物と昭和100年記念事業」として、地域に残る文化財である歴史的建造物をととして、①歴史的建造物の一般公開、②歴史講座の開講、③記念誌などの作成、と実施した事業において、新たに得ることができた知見や資料は、今後も最北のまち稚内における地域づくりに活かしていきたいと考えています。



▶ 稚内市歴史・まち研究会 Facebook

<https://www.facebook.com/people/%E7%A8%9A%E5%86%85%E5%B8%82%E6%AD%B4%E5%8F%B2%E3%81%BE%E3%81%A1%E7%A0%94%E7%A9%B6%E4%BC%9A/100080408714717/#>

人口減少時代における自治体運営シンポジウムのご案内

(一財)北海道開発協会、北海道大学公共政策大学院 共催

(一財)北海道開発協会では、「北海道の持続可能な自治体展開に関する調査研究」について、北海道大学公共政策大学院とともに実施しております。道内自治体の現状を把握するとともに、今後、更に進む人口減少の中、自治体運営を持続的に行うためには、既存事務の見直し、デジタル導入による業務改善、自治体同士の横連携及び北海道との垂直連携を視野に入れた対応が必要と考え、課題と方策を調査しております。

今回、北海道大学公共政策大学院との共催により、シンポジウムを10月及び11月に開催する運びとなりましたので、この機会に是非ご参加ください。

第 1 回 「人口減少時代における公共施設の再編と自治体間広域連携」

講 師 士別市長 渡辺 英次 氏
東神楽町長 山本 進 氏

日 時 令和 8 年10月13日 (火) 14時45分～18時00分

場 所 北海道大学 文系共同講義棟 1 階 9 番講義室

第 2 回 「人口減少時代におけるまちづくりー賢い公共施設の集約」

講 師 北海道大学 大学院工学研究院建築都市部門
教 授 森 傑 氏

日 時 令和 8 年11月24日 (火) 14時45分～18時00分

場 所 北海道大学 文系共同講義棟 1 階 9 番講義室

※ 本シンポジウムは、北海道大学公共政策大学院の「公共経営事例研究」の一環として行われるものです。なお、タイトルにつきましては、変更される場合もございます。

＜問い合わせ先＞ E-mail: kenkyujo@hkk.or.jp

FAX 011-709-5225

(一財)北海道開発協会 開発調査総合研究所 担当：黒崎、木村

TEL 011-709-5213

北海道インバウンドフォーラム開催

「エアライン新規就航を契機とした北米からの誘客の可能性」

2026年冬季には、エアカナダ及びユナイテッド航空の2路線が、北海道に新たに就航します。北米との直行便が拡充される中、これらの路線の通年就航を実現するためには、需要が冬季に集中しがちな現状を踏まえ、夏季(グリーンシーズン)における観光誘客の強化が不可欠です。夏季の観光誘客を促進するためには、北海道内の観光事業者等が主体となり、魅力的な観光コンテンツの造成・磨き上げや受入環境の整備等、夏季ならではの取組を積極的に推進していくことが求められます。

こうした背景を踏まえ、本フォーラムでは、北海道の観光関連事業者を対象に、北海道観光の振興に資する重要な知見やアイデアを広く共有するとともに、2路線新規就航という貴重な機会を最大限に活かし、北海道の各地域が今まさに取り組むべき課題や方向性に気づくきっかけを提供することを目的として開催します。

開催
日時

2026年
10月27日(火)
14:00~16:30

開催
場所

国際ホール

札幌市中央区北4条西4丁目1番地
札幌国際ビル8階

フォーラム次第

■主催者代表あいさつ

- 国土交通省北海道運輸局観光部長

山崎 貴志

■基調講演

- 北米との新たな航空ネットワークが拓く北海道観光の可能性

北海道エアポート株式会社 代表取締役社長

山崎 雅生氏

■講演

- 日本への期待が変わる。北海道の価値が変わる。

～北米市場から考える、北海道の新しいデスティネーション価値～

株式会社 wondertrunk&co. 代表取締役共同 CEO 岡本 岳大氏

- 知られざる北海道の魅力を、世界の旅人へ

～セントリック 札幌を拠点に、四季とローカルに出会う～

ハイアットセントリック札幌 総支配人

瀧村 勇毅氏

■パネルディスカッション

北海道エアポート株式会社 代表取締役社長

山崎 雅生氏

株式会社 wondertrunk&co. 代表取締役共同 CEO

岡本 岳大氏

ハイアットセントリック札幌 総支配人

瀧村 勇毅氏

(コーディネーター)

国土交通省北海道運輸局観光部長

山崎 貴志

主催

国土交通省 北海道運輸局
一般財団法人 北海道開発協会

後援

国土交通省 北海道開発局
北海道
公益社団法人 北海道観光機構

申込み方法

参加
無料

フォーラムの参加申込は、
Web サイトの申込みフォームから
お申込みください



<https://inbound-jp.info/forum/>

問合せ先 北海道開発協会 開発調査総合研究所

TEL:011-709-5213 Mail:inbound-info@hkk.or.jp

お知らせ

✎ 研究所だより ✎

今を遡ること、ウン十年前、中学校の修学旅行のときに筆者は、札幌を出て、青函連絡船に乗って一日がかりで青森県に行きました。当時は、もしかしたら、大人たちの東京出張も汽車を使っていたかもしれません。

その後、社会人になっての若い頃の道内出張は、目的地が釧路だろうと稚内だろうと鉄道を使っていました。しかし、最近は、飛行機を使うようになり、あっという間に到着です。便利になりました。

ただ、一度車両に乗ったらあとは座席に身を沈めて行けばいい列車と違って、飛行機は、空港まで行くという作業があって（特に、丘珠空港は近距離とはいえ、交通アクセスがさほど良くない）、諸手続きがあって、乗り込むのにもときにはトラップを上って、となかなか落ち着かないものです。筆者には断然、鉄道利用の方が低ストレスです。

とはいえ、北海道の鉄道はなかなか困難な状況に直面していることも事実です。出張で旭川から留萌まで列車で移動したことがありますが、今では不可能な話になりました。

鉄道を中心に北海道の歴史を振り返る原田伸一氏の「北海道の開発と鉄道」が本号にて最終回となります。鉄道が北海道の発展に貢献した足跡を振り返り、鉄道にとどまらず北海道全体の将来を考えていく上で何度でも読み返したい大変貴重な論稿です。（目黒）

10月13日(火)、11月24日(火)

『人口減少時代における自治体運営』シンポジウム

※詳細は38ページをご覧ください。

10月27日(火)

北海道インバウンドフォーラム

※詳細は39ページをご覧ください。

11月5日(木)

第40回寒地土木研究所講演会

基調講演

「平成28年の北海道豪雨から10年

一治水技術の進展と次の10年への展望」

泉 典洋 氏(北海道大学大学院工学研究院 教授・工学院院长)

●場 所 共済ホール(札幌市中央区北4条西1丁目共済ビル6F)

●時 間 13:20~17:00(受付・開場12:30~)

●参加費 無料(事前申込)

※詳細及び申し込みは寒地土木研究所HP

もしくはQRより

<https://chouseikan.ceri.go.jp/web/event/>

主催/国立研究開発法人土木研究所寒地土木研究所

問い合わせ/寒地土木研究所寒地技術推進室

TEL 011-590-4046



国営滝野すずらん丘陵公園

10月1日(木)~11月10日(火)

巨大ホオノキの葉っぱをさがせ!

滝野の森に落ちている「巨大ホオノキの葉っぱ」をさがしてみよう!森の交流館の受付に持ってきていただくスタッフがサイズをはかります。「タテ+ヨコ=60センチ以上」あれば景品をプレゼント!

●参加費 無料(入園料・駐車料金は別途)

●場 所 森の交流館

●時 間 9:00~17:00

※詳細は当公園ホームページ(URL: <http://www.takinopark.com/>)をご覧ください。お問い合わせ先(011-592-3333)までお問い合わせください。

次号から、当協会との包括連携協定の趣旨を踏まえた、旭川市立大学・同大学短期大学部によるレポートがスタートします。2027年4月号までの連載を予定しておりますので、読者の皆様におかれましては、どうぞお楽しみに!

●「開発こうほう」へご意見・ご感想をお寄せください。

(一財)北海道開発協会広報研修出版部

〒001-0011

札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル

電話 011(709)5212

e-mail: pr@hkk.or.jp

●「開発こうほう」は、北海道開発協会のホームページでもご覧になれます。

●(一財)北海道開発協会では、賛助会員を募集しています。詳しくは、ホームページをご覧ください。

開発こうほう 第758号 令和8年10月1日発行

発行 (一財)北海道開発協会

印刷 (株)須田製版 不許複製

<https://www.hkk.or.jp/>



【新発寒事業所】

業 務 内 容

- 土木工事全般
- 道路維持管理業務
- TVカメラ調査・管更生
- 除排雪業務
- 排水構造物清掃
- 産廃物収集運搬及び中間処理

 HRM HOLDINGS GROUP

HRM
HOKKAIDO ROAD MAINTENANCE

北海道ロードメンテナンス株式会社



h-rm.co.jp/

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS

本 社	〒060-0031	札幌市中央区北 1 条東12丁目22番地48	TEL (011) 241-1692	FAX (011) 241-7774
真駒内事業所	〒005-0861	札幌市南区真駒内52番地	TEL (011) 592-6512	FAX (011) 594-2258
発 寒 事 業 所	〒063-0835	札幌市西区発寒15条12丁目 1 -25	TEL (011) 665-3259	FAX (011) 665-8447
八 軒 事 業 所	〒063-0849	札幌市西区八軒 9 条西 9 丁目 1 -31	TEL (011) 676-9810	FAX (011) 676-9820
北 見 事 業 所	〒099-0878	北見市東相内町110番17	TEL (0157) 36-9811	FAX (0157) 36-9812

豊かな人間環境の創造に貢献

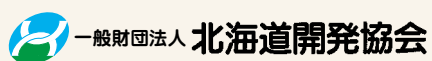
清流 [美々川]

地下水から川が始まり、湿原の中を蛇行し、生き物の宝庫ウトナイ湖につながるこの美々川は、広大な石狩低地帯においても唯一の原始河川として、その美しい姿を残しています。



株式会社 ドーコン

本社／〒004-8585 札幌市厚別区厚別中央1条5丁目4番1号 TEL.011-801-1500 FAX. 011-801-1600 URL <https://www.docon.jp/>



〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル
TEL (代表) 011-709-5211